

国衙下辻II遺跡

－小規模土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

国衙下辻Ⅱ遺跡

—小規模土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

群馬県安中市教育委員会



遺跡地遠景（南東より）

序

安中市松井田町国衛地区は、細野原丘陵上に位置しています。細野原丘陵は、市北西部に位置する剣の峰から南東に延びる丘陵です。この丘陵は標高約 500 メートル以下になると、比較的なだらかな台地状を呈するようになり、多くの土地が水田や畠地等の農地として利用されています。国衛地区は、この丘陵の南東端部、九十九川・増田川の合流点付近に位置しています。

このたび、農道改良工事に先立ち、当該地域の埋蔵文化財発掘調査を実施致しましたところ、弥生時代・古墳時代を中心とする遺構・遺物が発見されました。農道の一部分の調査ということで、調査面積は合計約 242 m²と決して広くはありませんが、弥生時代後期住居址 4 棟・古墳時代中期～後期住居址 6 棟等が確認されたのです。農道部分の狭い範囲においてこれだけの住居址が確認されたことにより、周辺地域に一定規模の当該期集落が営まれていたことがほぼ確実となりました。今回の調査により、国衛地区的原始・古代の歴史に新しい 1 ページを加えることができました。このように、一つ一つの調査を積み重ね、私たちが生きている現在までの道筋を確認し未来に伝えていくことは、今を生きる私たちの重要な責務であると考えます。調査された遺跡は二度と元の姿に戻すことができません。本報告書が国衛地区的歴史を解明する一助となり、幅広く活用していただければ誠に幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に参加された皆様、報告書刊行に至るまでご指導・ご協力をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げ序と致します。

平成 26 年 3 月

安中市教育委員会
教育長 中澤 四郎

例 言

- 1 本書は、小規模土地改良事業に伴い、平成 24 年度・25 年度に発掘調査・資料整理を実施した国衙下辻 II 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査地は群馬県安中市松井田町国衙 348 他である。遺跡名は国衙下辻 II 遺跡（遺跡略号 K 7 B）、調査面積は約 242 m²である。
- 3 発掘調査は、安中市の委託を受け、安中市教育委員会が直営で実施した。
- 4 確認調査については、国宝重要文化財等保存整備費補助金（文化庁補助金）・群馬県文化財保存整備費補助金により、平成 20 年度に実施した。本調査及び整理作業については、原図者である安中市の負担により実施した。確認調査・発掘調査・整理作業の期間は次のとおりである。
- | | |
|-------------------|---|
| 確認調査 | 平成 20 年 11 月 2 日～11 月 30 日 |
| 第一次調査（国衙下辻遺跡） | 発掘調査 平成 20 年 12 月 1 日～平成 21 年 1 月 16 日
整理作業 平成 21 年 1 月 19 日～11 月 30 日 |
| 第二次調査（国衙下辻 II 遺跡） | 発掘調査 平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 1 月 11 日
整理作業 平成 25 年 1 月 15 日～11 月 29 日 |
- 5 発掘調査・整理作業とともに井上慎也（安中市教育委員会学習の森発掘調査係主査・文化財保護主事）・菅原龍彦（同主事）が担当し、壁伸明（安中市行政事務嘱託）がこれを補佐した。また、水谷貴之（株式会社測研埋蔵文化財調査員）が発掘調査員として現地調査を補佐した。※機構改革により平成 24 年度の文化財係は、平成 25 年度「文化財係」と「発掘調査係」の 2 係になり、発掘調査係が整理作業を継続した。
- 6 本書の編集・執筆は菅原と壁が行い、中里徳子がこれを補佐した。
- 7 遺物実測は菅原・中里が、遺物観察は菅原・壁が行った。
- 8 出土遺物・資料類は安中市教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び整理作業にあたっては、次の方々・機関よりご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
- 石丸教史 坂口一 杉山秀宏（株）測研（有）毛野考古学研究所（株）飯沼組
- 10 調査組織（平成 24 年度～25 年度）
- | | |
|----------------|-----------------------|
| 安中市教育委員会事務局 | |
| 教育長 | 中澤四郎 |
| 教育部長 | 佐俣信之 |
| 学習の森所長 | 佐藤房之 |
| 文化財係長（主幹） | 藤巻正勝（事務総括・平成 24 年度） |
| 主査（文化財保護主事） | 深町真（平成 24 年度） |
| 主事 | 小此木克之（平成 24 年度） |
| 発掘調査係長（課長補佐） | 千田茂雄（事務総括・平成 25 年度） |
| 主査 | 原久美子（経理担当） |
| 主査 | 瀧川仲男 |
| 主査（文化財保護主事） | 井上慎也（発掘調査・整理作業担当） |
| 主事 | 菅原龍彦（発掘調査・整理作業担当） |
| 安中市行政事務嘱託 | 壁伸明（整理作業補助） |
| 株式会社測研埋蔵文化財調査員 | 水谷貴之（発掘調査補助・平成 24 年度） |
- 11 発掘調査・遺物整理従事者
- 生駒朝男 今井保美 岩井英雄 岩坂康男 上原上 鬼形敦子 鬼形栄子 小野毅 成順八千代
染谷綾子 竹井五郎 多胡栄夫 多胡茂子 中里徳子 根岸紀和代 萩原静夫 萩原治枝 廣上良枝
湯本久江

凡 例

- 1 遺構実測図は1/60・1/40を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
- 2 遺物実測図は1/4を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
- 3 遺構図中の北マークは国家座標の北を表している。座標系は世界測地系を使用した。
- 4 土層説明中の記号・略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準：「新版標準土色帖」による。
色調く：より明るい方向を示す（暗く明）。
しまり、粘性 ◎：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし
混入物の量 ◎：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%） ※：若干（1～3%）
×：なし
混入物 RP：ローム粒子（溶け込んだ状態） RB：ロームブロック（固まりの状態）
YP：浅間板鼻黄色軽石
- 5 住居址遺構図中のピットのスクリーントーンは、次の深さを表している。

○ 0～19cm ● 20～39cm ○ 40～59cm ● 60cm以上
- 6 遺構図版中の●はセクション・エレベーションのポイントを、○は区分けのポイントを表している。
- 7 遺物分布図に用いた記号は以下のとおりである。

	10g	100g	1000g		10g	100g	1000g
弥生土器 褐	●	●	●	土師器 褐	○	○	○
弥生土器 壱	●	▲	▲	土師器 壱	△	△	△
Y住出土土器				H住出土土器			
縄文土器	●	*	*	縄文土器	●	*	*
土師器	■	■	■	弥生土器	●	●	●
須恵器	□	□	□	須恵器	□	□	□
- 8 出土遺物図版断面図の■は須恵器を表している。
- 9 本文及び表中等で示す火山灰の名称は、以下の記号を用いている。

浅間A軽石：As-A 浅間B軽石：As-B 浅間C軽石：As-C 浅間板鼻黄色軽石屑：As-YP
- 10 遺物観察表内の（ ）は推定値を、（< ）は残存値を示している。
- 11 本文及び図版において、下記のとおり遺跡名を省略して表記している場合がある。

国衙下辻遺跡 → 下辻遺跡
国衙下辻II遺跡 → 下辻II遺跡

目 次

序	第4章 遺構と遺物 ----- 9
例言	第1節 概要 ----- 9 (1) 縄文時代 ----- 9 (2) 弥生時代 ----- 9 (3) 古墳時代 ----- 9 (4) 古代 ----- 9 (5) 中世～近世 ----- 9
凡例	第2節 弥生時代 ----- 9 (1) 墓穴住居址 ----- 9 (2) 土坑 ----- 15
目次	第3節 古墳時代 ----- 15 (1) 墓穴住居址 ----- 15 (2) 土坑・ピット ----- 31
第1章 経過 ----- 1	第4節 時期不明遺構 ----- 32
第1節 調査に至る経過 ----- 1	第5節 遺構外出土遺物 ----- 35
第2節 発掘作業の経過 ----- 1	
第3節 整理作業の経過 ----- 1	
第2章 遺跡の位置と環境 ----- 1	第5章 成果と課題 ----- 36
第1節 地理的環境 ----- 1	
第2節 歴史的環境 ----- 2	
第3章 調査の方法 ----- 2	
第1節 調査の方法 ----- 2	写真図版
第2節 基本層序 ----- 5	抄録

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡位置図 ----- 3	第20図 H-8号住居址出土遺物(2) ----- 18
第2図 国衙下辻II遺跡基本土層 ----- 5	第21図 H-9号住居址(1) ----- 19
第3図 グリッド設定図(1) ----- 6	第22図 H-9号住居址(2) ----- 20
第4図 グリッド設定図(2)・全体図 ----- 7	第23図 H-9号住居址出土遺物 ----- 20
第5図 Y-2号住居址(1) ----- 9	第24図 H-10・11号住居址 ----- 21
第6図 Y-2号住居址(2) ----- 10	第25図 H-10号住居址出土遺物 ----- 21
第7図 Y-2号住居址出土遺物 ----- 10	第26図 H-11号住居址出土遺物 ----- 22
第8図 Y-3号住居址 ----- 11	第27図 H-12号住居址(1) ----- 22
第9図 Y-3号住居址出土遺物(1) ----- 11	第28図 H-12号住居址(2) ----- 23
第10図 Y-3号住居址出土遺物(2) ----- 12	第29図 H-12号住居址出土遺物(1) ----- 24
第11図 Y-4号住居址 ----- 13	第30図 H-12号住居址出土遺物(2) ----- 25
第12図 Y-4号住居址出土遺物 ----- 13	第31図 H-12号住居址出土遺物(3) ----- 26
第13図 Y-5号住居址 ----- 14	第32図 H-13号住居址 ----- 28
第14図 Y-5号住居址出土遺物 ----- 14	第33図 H-13号住居址出土遺物(1) ----- 28
第15図 14号土坑 ----- 15	第34図 H-13号住居址出土遺物(2) ----- 29
第16図 14号土坑出土遺物 ----- 15	第35図 15号土坑 ----- 31
第17図 H-8号住居址(1) ----- 15	第36図 15号土坑出土遺物 ----- 31
第18図 H-8号住居址(2) ----- 16	第37図 16号土坑 ----- 31
第19図 H-8号住居址出土遺物(1) ----- 17	第38図 16号土坑出土遺物 ----- 31

第39図 21号ピット	32	第48図 H区出土遺物	35
第40図 21号ピット出土遺物	32	第49図 J区出土遺物	35
第41図 6号溝、9号土坑	32	第50図 時期別遺構位置図	37
第42図 10~13・17・18号土坑、22号ピット	33	第51図 下辻II遺跡H-12号住居址	41
第43図 I区東壁セクション	34	第52図 田中西遺跡H-27号住居址	41
第44図 11号土坑出土遺物	34	第53図 加賀塚遺跡2H-99号住居址	42
第45図 18号土坑出土遺物	34	第54図 見立相好遺跡IIH-1号住居址	42
第46図 F区出土遺物	35	第55図 見立相好遺跡IIH-2号住居址	43
第47図 G区出土遺物	35	第56図 見立相好遺跡IIH-3号住居址	43

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	4	第15表 H-13号住居址出土遺物観察表(2)	30
第2表 Y-2号住居址出土遺物観察表	10	第16表 15号土坑出土遺物観察表	31
第3表 Y-3号住居址出土遺物観察表	12	第17表 16号土坑出土遺物観察表	31
第4表 Y-4号住居址出土遺物観察表	14	第18表 21号ピット出土遺物観察表	32
第5表 Y-5号住居址出土遺物観察表	14	第19表 11号土坑出土遺物観察表	34
第6表 14号土坑出土遺物観察表	15	第20表 18号土坑出土遺物観察表	34
第7表 H-8号住居址出土遺物観察表(1)	18	第21表 溝観察表	34
第8表 H-8号住居址出土遺物観察表(2)	19	第22表 土坑・ピット観察表	34
第9表 H-9号住居址出土遺物観察表	20	第23表 F区出土遺物観察表	35
第10表 H-10号住居址出土遺物観察表	22	第24表 G区出土遺物観察表	35
第11表 H-11号住居址出土遺物観察表	22	第25表 H区出土遺物観察表	35
第12表 H-12号住居址出土遺物観察表(1)	26	第26表 J区出土遺物観察表	36
第13表 H-12号住居址出土遺物観察表(2)	27	第27表 時期別住居址一覧	36
第14表 H-13号住居址出土遺物観察表(1)	29	第28表 カマド観察表	40

写真図版目次

PL. 1	F区(全景・6号溝・9号土坑)	PL. 8	K2区(Y-3号住)
PL. 2	F区(10~12号土坑)		L区(Y-4号住・H-12号住)
	G区(H-8号住)	PL. 9	L区(H-12号住)
PL. 3	G区(全景・H-8号住)		M区(Y-5号住・H-13号住)
PL. 4	H区(Y-2号住・13号土坑)	PL. 10	M区(Y-5号住・H-13号住・ 17・18号土坑・全景)
PL. 5	H区(全景)	PL. 11	Y-2~5号・14号土坑・ H-8号住出土遺物
	I区(全景・14号土坑)	PL. 12	H-8~10号・12号住出土遺物
	J区(H-9号住)	PL. 13	H-11・12号住出土遺物
PL. 6	J区(H-9号住)	PL. 14	H-12号住出土遺物
	K1区(全景・H-10・11号住・ 21号ピット)	PL. 15	H-13号住・15・16号土坑・ 21号ピット・11号土坑・18号土坑・ 遺構外出土遺物(F区・G区・ H区・J区)
PL. 7	K1区(H-10・11号住・ 21号ピット・15・16号土坑)		
	K2区(Y-3号住)		

第1章 経過

第1節 調査に至る経過

確認調査及び工事区域南半の本調査に至る経過については、『国衙下辻遺跡 2010 安中市教育委員会』（同報告書により報告した調査を第1次調査、今回の調査を第2次調査と呼称する）の第1章に記しているので、ここでは省略する。第2次調査に至った概略を記す。

平成24年7月12日、安中市役所松井田支所産業建設課（以下産業建設課）より同市教育委員会（以下教育委員会）へ、国衙下辻地区農道舗装工事に係る埋蔵文化財についての照会があった。工事区域では、平成20年度に実施した確認調査において、工事区域ほぼ全域より弥生時代から古墳時代の住居址・溝等が確認されている。しかし、時間と予算の関係上から南半分の本調査にとどめた。7月18日、教育委員会は、今回舗装工事を行う北半分においても遺構は確認されており、工事前に調査が必要である旨を回答した。産業建設課と教育委員会の協議の結果、計画の変更是困難であるという結論に達したため、発掘通知等の法的手続きが完了した11月1日より本調査を実施し、記録保存を図ることとした。

第2節 発掘作業の経過

前述のように、平成20年度に実施した確認調査結果より、北半分にも弥生～古墳時代の集落が展開していることは確実であった。第2次調査では、試掘調査時に確認された遺構部分のみ表土掘削し、作業効率の向上を試みた。調査区・遺構番号は第1次調査の継続とし、調査区についてはF区からM区までの9区を設定した（K区についてはK1区とK2区を設定した）。周辺農地の耕作状況より長期間の全面通行止めが困難であること、農道以外に残土置き場が確保できないことから、北のF区より各区ごとに、表土掘削・遺構確認・遺構掘削・遺構測量・埋め戻しのサイクルで調査を行った。遺構の平面測量は平板測量を基本とし、スケールは原則1/20で行った。断面測量についてもスケール1/20で行った。遺構の記録写真は、35mmカラーフィルム・白黒フィルム・デジタルカメラで水谷が撮影した。作業風景も適宜撮影した。1月11日、M区の埋め戻しまで完了し、現地調査が終了した。

第3節 整理作業の経過

資料整理は発掘調査で得られた図面・写真・出土遺物を整理し、各遺構・遺物の状態が客観的に把握できるように資料化することを主目的として実施した。

出土遺物は全て水洗いを行い、小破片を除いて注記した。ただし、石器等は遺跡名・出土地点等を明記したパッケージに収納した。注記には下記のような略記号を使用した。

遺跡名→K7B 弥生時代住居址→Y 古墳時代住居址→H

接合・復元は可能な限り行った。接合にはセメダインCを、復元には必要に応じてエポキシ系樹脂修復剤を用いたが、基本的には補強を目的としているため、必要最小限の復元にとどめている。

遺物の接合・復元と並行して、図面基礎整理・各種台帳整理・写真整理等も実施した。遺物実測・トレース・遺物観察・遺物写真撮影は原則直営で行ったが、資料整理を行う人員の関係から、土器・石器の一部を（有）毛野考古学研究所に委託した。遺構図・遺物実測図はイラストレーター10でデジタルトレースを行い作業の効率化を図った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

安中市は関東平野の周辺部である群馬県西部に位置し、北から東は高崎市、南東は富岡市、南西は下仁田町、そして西は碓氷峠を挟んで長野県北佐久郡軽井沢町と接している。長野県との県境をなす市の

北西部から南西部にかけては、標高 1000m を超える山々が連なっている。この付近からは数多くの小河川が流出しており、これらは合流を重ねつつ市東部の平野へと至り、やがては高崎市内において島川と合流している。これらの東流する河川の中で比較的大規模なものが増田川・九十九川・碓氷川である。この 3 河川は、北西から南東方向へ並行するように流下している。各河川の間には河岸段丘が発達し、分水嶺となる丘陵が河川に並走して延びている。

本遺跡が位置するのは、増田川と九十九川に挟まれた細野原丘陵の末端部であり、遺跡地の東で兩河川が合流している。細野原丘陵は、剣の峰(1429.6m)から南東に延びる松井田丘陵より霧積ダム東方付近で分岐し、高戸谷山(739.3m)を経て増田川・九十九川の合流点へと続く丘陵である。本丘陵の北には増田川を隔て長者久保・上野丘陵が並走し、九十九川を隔てた南には松井田丘陵が並走している。標高 500m 付近以下になると、細野原丘陵上はなだらかな台地状を呈するようになる。この台地上には比較的大規模な水田や畑地が営まれおり、本市の主要な農耕地帯の一つとなっている。そして、増田川と九十九川の合流点が近づく標高 250m 付近以下より地形はいっそうなだらかになり、丘陵先端部にかけて国衙・下増田の集落や水田・畑地帯が形成されている。遺跡の所在地は安中市松井田町国衙下辻 348 他である。遺跡の南西には松井田丘陵越しに妙義山が偉容を示し、北西から西にかけては長野県境の山々を一望できる地である。

第 2 節 歴史的環境

本遺跡の周辺では、これまでの発掘調査等により多くの遺跡が確認されている。それらについて概観する（括弧内数字は第 1 図及び第 1 表に対応する）。

本遺跡(1)に近い細野原丘陵南東端付近においては、広範にわたり绳文時代から近世の遺跡が確認されており、国衙遺跡群(3)を構成している。本遺跡も国衙遺跡群に属するものである。国衙遺跡群を構成する遺跡としては、下増田松原遺跡(4)・下増田上田中遺跡(5)・下増田下田中遺跡(6)・国衙森浦朝日遺跡(7)等があげられる。また、古代律令体制期の官道である東山道は、本地域を通過していたとする考えもある。さらに、本遺跡西方の細野原丘陵上及び下位段丘上においては、下増田天神原遺跡(8)・高梨子門坂遺跡(9)等が確認されている。

北を並走する長者久保・上野丘陵上及び下位段丘上にも多くの遺跡が存在する。本遺跡東方の小日向地区においては、土地改良事業に伴い平成 16 年度より発掘調査が開始され、小日向遠古遺跡(10)・小日向遠地谷戸遺跡(11)・小日向瀬遺跡(12)・小日向老丁田遺跡(13)・小日向田中遺跡(14)・小日向田中西遺跡(15)・小日向白山遺跡(16)・小日向新浜遺跡(17)等の発掘調査が実施された。結果、300 棟を超える绳文～平安時代住居址が確認された。また、周辺には天皇塚古墳(18)・琴平山古墳(19)等多数の古墳が存在し、前述の遺跡とともに小日向地区遺跡群(20)を構成している。さらに、本遺跡の北方、増田川を隔てた対岸において、下増田百石遺跡(21)・下増田下原遺跡(22)・下増田十二平遺跡(23)等が調査されている。

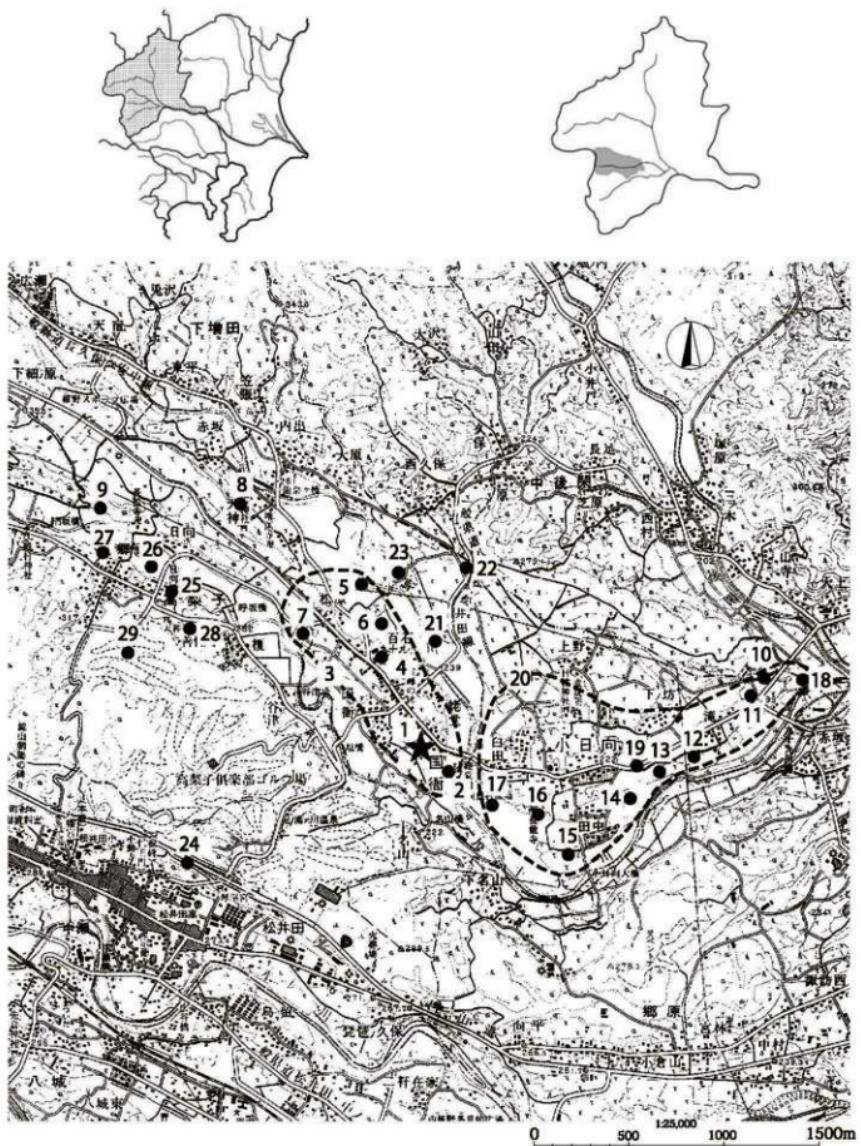
九十九川の南に對峙する松井田丘陵上には、奈良・平安時代の集落で、鉄器等の良好な資料が出土している愛宕山遺跡(24)が存在する。また、西の九十九川右岸高梨子地区にも、高梨子八木田遺跡(25)・高梨子拂下遺跡(26)・高梨子森下遺跡(27)・高梨子中貝戸遺跡(28)・高梨子三次郎遺跡(29)等多数の遺跡が確認されている。

第 3 章 調査の方法

第 1 節 調査の方法

発掘調査の方法・手順は、ほぼ通例に準じているが、一部安中市教育委員会が実施している独自の方法を採用している。

発掘調査においては、バックフォーによる表土掘削後、ジョレンを用いて遺構プランの確認を行った。



第1図 周辺の遺跡位置図

No.	遺跡名	所在地	備考	参考文献	備考
			備考	参考文献	備考
1	国衙下辻Ⅱ遺跡	安中市松井田町国衙348他	○ ○	本書報告遺跡	
2	国衙下辻遺跡	安中市松井田町国衙329他	○ ○	弥生～古墳時代集落、古墳等	1
3	国衙遺跡群	安中市松井田町国衙40他	○ ○ ○	繩文～平安時代集落、古墳等	2
4	下増田松原遺跡	安中市松井田町下増田447-1他	○	繩文時代集落	3
5	下増田上田中遺跡	安中市松井田町下増田554他	○ ○ ○	1号古墳はT字形石室を有する	4
6	下増田下田中遺跡	安中市松井田町下増田甲360他	○ ○ ○	平成6年松井田町教育委員会調査	
7	国衙森浦朝日遺跡	安中市松井田町国衙21-1他	○ ○ ○	昭和59～60年松井田町教育委員会調査	
8	下増田天神原遺跡	安中市松井田町下増田996他	○ ○	三角墳形土器品出土(表探)	5
9	高梨子們坂遺跡	安中市松井田町高梨子們坂	○	遺物散布地	
10	小日向遠丸遺跡	安中市松井田町小日向1,252他	○ ○ ○	弥生～古墳時代集落	6
11	小日向遠地谷戸遺跡	安中市松井田町小日向1,185-1他	○ ○ ○	弥生～古墳時代集落	6-7
12	小日向纏遺跡	安中市松井田町小日向943-3他	○ ○ ○	弥生時代集落、古墳	6
13	小日向老丁遺跡	安中市松井田町小日向821他	○ ○ ○	弥生時代集落、古墳	6
14	小日向田中遺跡	安中市松井田町小日向116他	○ ○ ○	弥生～古墳時代集落、古墳	6
15	小日向田中西遺跡	安中市松井田町小日向259他	○ ○ ○	繩文時代・古墳時代・古代集落、弥生時代礫床墓	6
16	小日向白山遺跡	安中市松井田町小日向456他	○ ○ ○	古墳時代・平安時代集落	6
17	小日向山上新浜遺跡	安中市松井田町小日向522他	○	古墳時代集落	6
18	天皇塚古墳	安中市松井田町小日向1,188他	○	形象埴輪(馬・人物等)出土	6
19	琴平山古墳	安中市松井田町下増田857他	○	6世紀前半の前方後円墳	6
20	小日向地区遺跡群	安中市松井田町小日向1,152他	○ ○ ○ ○	弥生～古墳時代集落、古墳	6
21	下増田石子遺跡	安中市松井田町下増田82,763他	○	平成6年松井田町教育委員会調査	
22	下増田下原遺跡	安中市松井田町下増田2,674-1他	○	繩文時代・古代集落	8
23	下増田十二平遺跡	安中市松井田町下増田2,599他	○	平成8年松井田町教育委員会調査	
24	愛宕山遺跡	安中市松井田町松井田1,058他	○ ○ ○ ○	古墳～平安時代集落	9
25	高梨子八木田遺跡	安中市松井田町高梨子八木田	○ ○ ○ ○	遺物散布地	
26	高梨子湖下遺跡	安中市松井田町高梨子427他	○ ○ ○ ○	A-B下水田	10
27	高梨子藪下遺跡	安中市松井田町高梨子410他	○ ○ ○ ○	古墳～平安時代集落	10
28	高梨子中貝戸遺跡	安中市松井田町高梨子中貝戸	○ ○ ○ ○	遺物散布地	
29	高梨子三次郎遺跡	安中市松井田町高梨子甲1,117他	○ ○ ○ ○	繩文時代・古代集落	11

(参考文献)

- 壁 伸明 2010『国衙下辻遺跡』安中市教育委員会
- 水沢 祐彦 田口 修 1992『国衙遺跡群Ⅱ』松井田町教育委員会
- 壁 伸明 2006『下増田松原遺跡』松井田町教育委員会
- 菅原 龍彦 壁 伸明 2012『下増田上田中遺跡』安中市教育委員会
- 田口 修 1993『下増田天神原遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会
- 壁 伸明他 2010『小日向地区遺跡群』安中市教育委員会
- 田口 修 1994『小日向遠地谷戸遺跡』松井田町教育委員会
- 壁 伸明 金子 正人 2001『下増田下原遺跡』松井田町下増田下原遺跡調査会
- 松島 栄治 徳江 秀夫松 2000『愛宕山遺跡』群馬県教育委員会・時群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 壁 伸明 常深 尚 2008『高梨子地区遺跡群』安中市教育委員会
- 田口 修 長井 正欣 1998『高梨子三次郎遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会

第1表 周辺の遺跡一覧

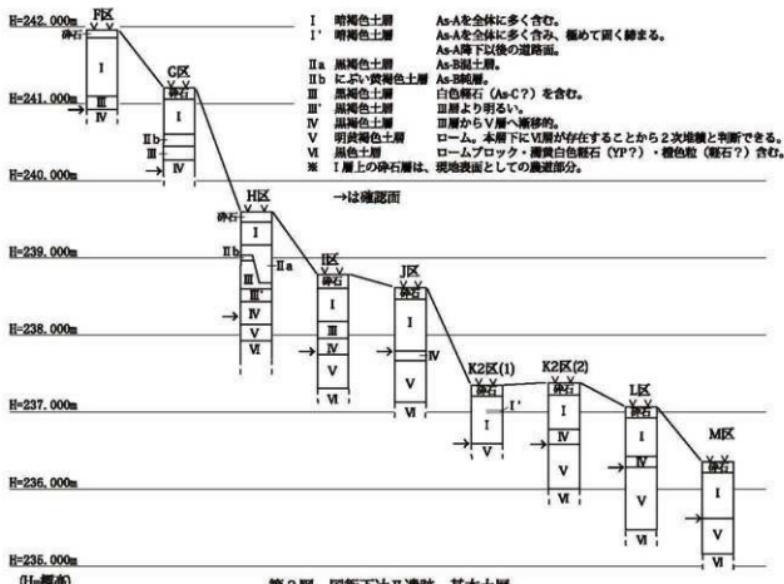
検出された遺構については、遺構の内容に応じた精査を行い、遺構検出状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況等をカラーフィルム・モノクロフィルム(35mm)、デジタルカメラで撮影した。住居址の調査については「分層16分割法」を基本とし、4本の土層観察用ベルトを十字状に残し、層位毎に掘り下げ精査した。また、床面直上付近より出土した遺物の一部は、出土時の形状・位置・高さ等を記録した。また、竈・貯蔵穴・柱穴等の住居址に関する遺構は、16分割とは別に遺構毎に遺物を取り上げた。竈及び土坑等の調査は、平面プランを確認後半裁した。そして、土層の状況を図面及び写真で記録後完掘した。遺構平面図は、平板測量により縮尺1/20で作図した。土層堆積状況等の断面図についても直営で作成した。

なお、グリッドについては、第1次調査の時に今回の部分まで設定したものを使っているので、「国衙下辻遺跡」を参照して欲しい。ただし、第2次調査においては、試掘調査において遺構が確認された部分のみをピンポイントで表土掘削し本調査を実施したので、基本的にグリッドで取り上げた遺物はない。本書中では、検出された遺構の位置をグリッドで表記している。

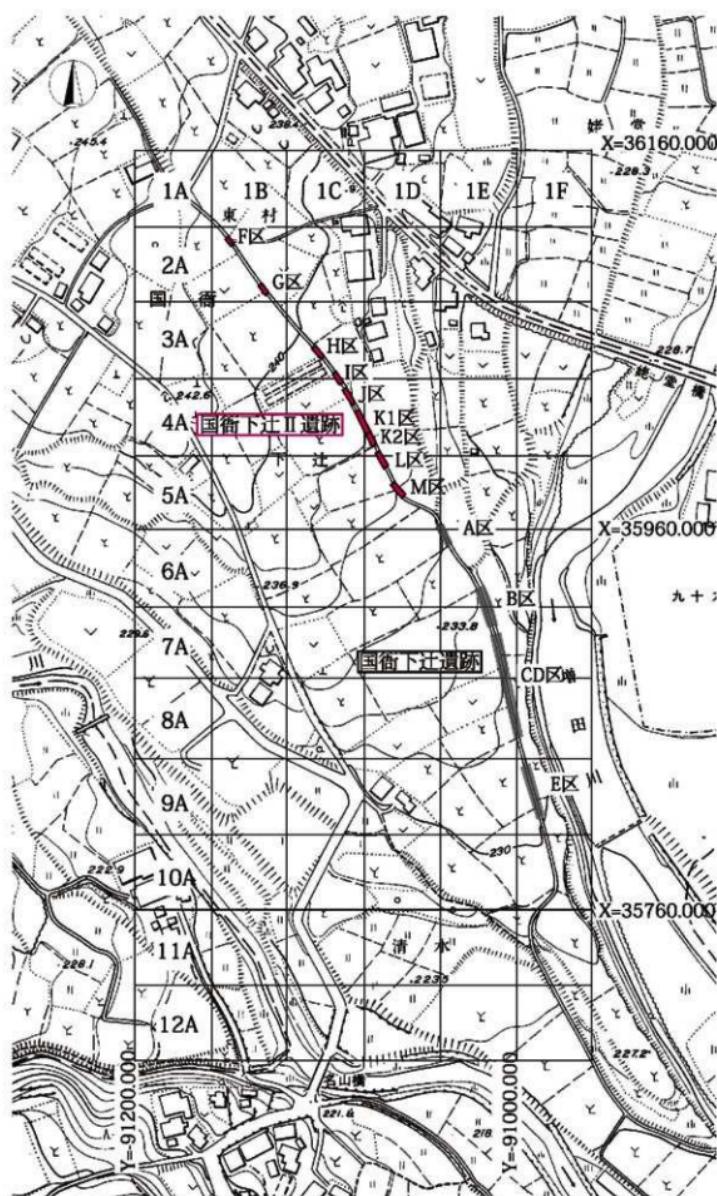
遺物整理は、遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・デジタルトレース・遺物観察表作成・写真撮影、図版作成の順に行った。これに並行して遺構図の整理、デジタルトレース、遺構図版作成、さらに写真整理、写真図版作成を行った。なお、遺物写真撮影にはデジタルカメラ(Nikon D90)を使用している。土器・石器等の出土遺物については、器種分類及び計測・計量を行い、各種台帳を作成した。さらに、これらの台帳のデータを利用し、住居址については各区・層からの遺物出土量が視覚的に分かるよう「遺物分布図」を作成し掲載した。遺構・遺物図版、各種表等の作成・レイアウトには積極的にパソコンを活用し、主にイラストレーター10によりデジタルデータ化し、作業効率の向上に努めた。

第2節 基本層序

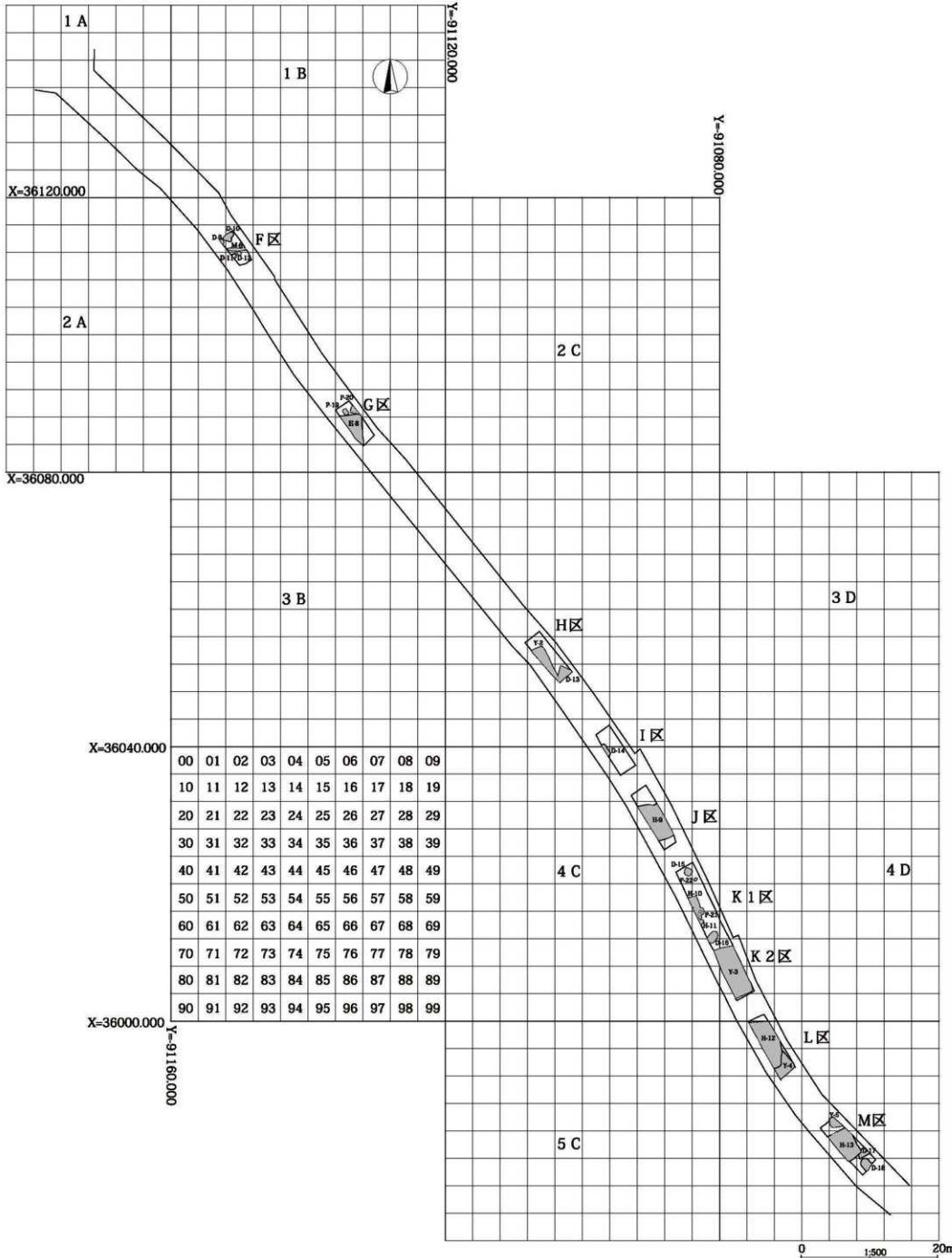
本遺跡の基本土層を区ごとに示す。



第2図 国衙下辻II遺跡 基本土層



第3図 グリッド設定図(1)



第4図 グリッド設定図(2)・全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 概要

(1) 繩文時代

前期中葉の所産と想定される、胎土に植物纖維が混入する土器片等が少量確認されている。また、詳細な時期の断定は難しいが、石鏃等の石器も出土している。明らかに繩文時代の所産と考えられる遺構の検出には至っていない。

(2) 弥生時代

住居址が4棟確認された。第1次調査では中期後半栗式期住居址が1棟確認されたが、第2次調査において検出された住居址は、いずれも後期樽式期の所産と考えられる。土坑では、出土遺物より14号土坑が樽式期の所産であると考えられる。今回の調査では4棟の住居址が確認されただけであるが、周辺地域の遺物散布状況から、一定規模の当該期集落が営まれていた可能性が高い。

(3) 古墳時代

住居址が6棟確認された。調査区が狭小であり、全体を調査できたものはない。住居構築時期は2時期に大別できる。即ち、5世紀半ば～後半を中心とする一群（H8号・10号・12号住居址）と、6世紀半ば～後半を中心とする一群（H9号・11号・13号住居址）である。これは、第1次調査においても概ね認められた傾向である。農道という細長い開発区域においてこれだけの住居址が確認されているので、周辺地域には大規模な当該期集落が展開している可能性が考えられる。住居址以外では、15号土坑・16号土坑・21号ピットが当該期の所産と想定される。

(4) 古代

古代所産と想定される遺物は少量であり、当該期の遺構と断定できるものはない。

(5) 中世～近世

前回の調査において確認されたAs-B混土層の硬化面は、今回検出されなかった。ただし、部分的にではあるがAs-A混土層の硬化面は確認されており、中世から近世にかけて、現在の農道に重複するように、維続して道路が存続していた可能性が考えられる。

以下、堅穴住居址が確認された本遺跡の主体をなす弥生時代・古墳時代について詳述する。なお、出土遺物による時期決定が困難である津・土坑・ピット等は、時期不明遺構として第4節において実測図・観察表等により報告する。また、調査区一括遺物については、遺構外出土遺物として第5節において報告する。

第2節 弥生時代

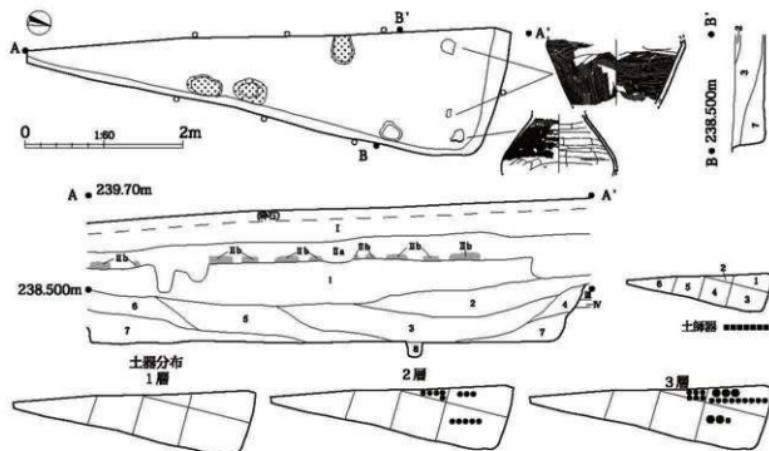
(1) 堅穴住居址

① Y-2号住居址（第5～7図、第2表、PL.4・5・11）

位置 H区、3C 63グリッド他に位置する。形状・特徴 全体を調査していないが長方形と想定される。東西不明（確認部分 1.8m）×南北 5.9m ×深さ 0.4m 覆土 しまった黒褐色土を主体とする。自然堆積と想定される。炉 検出されていない。遺物 住居北半から壺・甕等が一定量出土している。また、土師器片が混入している。時期 後期樽式期と考えられる。

遺構名	断面・層名	色調	しまり	粒性	調査用	備考
Y-2号	1 黒褐色土層10Y32/1	○	○		△	出土：炭化物・白色鉱石
	2 黒褐色土層10Y32/1	1<2	○	△	■	△
	3 黒褐色土層10Y32/2	○	△	△	○	■
	4 黒褐色土層10Y32/4	○	○	○	■	×
	5 黒褐色土層10Y32/1	1<5	○	△	△	■
	6 黒褐色土層10Y32/2	○	○	●	■	×
	7 黒褐色土層10Y32/3	○	○	●	■	×
	8 黒褐色土層10Y32/1	○	●	△	■	×

第5図 Y-2号住居址(1)



第6図 Y-2号住居址(2)



第7図 Y-2号住居址出土遺物

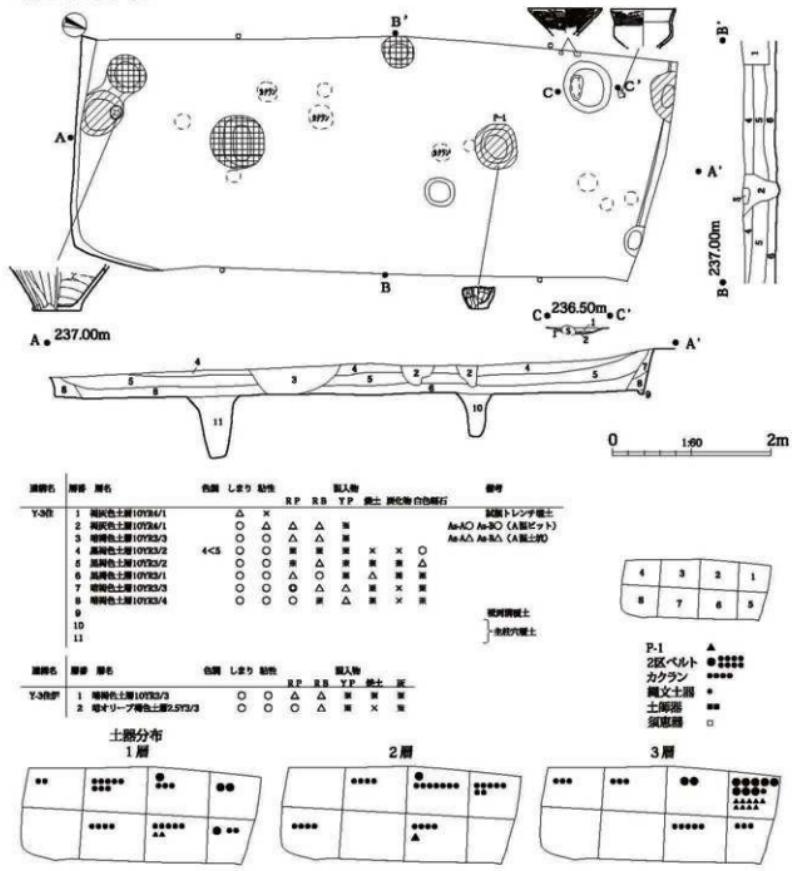
Y-2号住居址	番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③断面 ④残存	成・施形技法の特徴	
						外表面	内表面
1	新生土器 壺	3区3層 No.3	口径 底径 器高<12.2>	—	①青透 ②浅黃褐色 ③石灰・黒色粒・白色粒 ④側壁破片	縦隔壁状文(6箇/10mm)。底部上平状文(6箇/10mm 上→下)下半斜削り。 肩部横隔壁で。 縫隙。煤付着。	
2	新生土器 壺	1区3層 3区3層 No.1 No.2	口径 底径 器高<13.6> 部片	—	①良好 ②明黄褐色 ③チャート ④黑色颗粒、赤褐色胶 ⑤側壁破片	縫隙斜削毛。 底部上位箇所で、下位横・斜削毛。	
3	新生土器 壺	1区2層 2区2層	口径 底径 器高<7.1>	—	①青透 ②にいじき透色 ③砂 粒・黒色粒・藍色粒 ④頸部か ら脚部上位破片	單面L R範囲横ころがし。 横方向重磨き。	
4	新生土器 壺	3区3層	口径 底径 器高<2.7> 破片	—	①青透 ②にいじき透色 ③砂 粒・白色・黒色粒 ④頸部上位 破片	横削工具による斜位方向平行沈線。 比較以外不整方向 重磨き。 横方向重磨き。	

第2表 Y-2号住居址出土遺物概要表

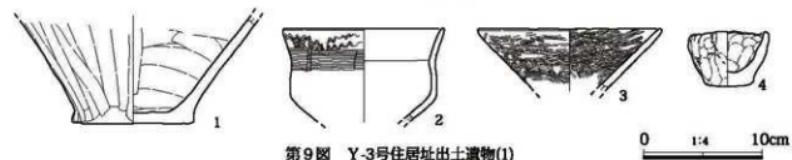
②Y-3号住居址 (第8~10図、第3表、PL.7・8・11)

位置 K2区、4D 80グリッド他に位置する。 形状・特徴 南北壁を検出。全体形状は長方形と想定される。東西不明(確認部分 3.0m) ×南北 7.3m ×深さ 0.4m。北壁側の一部に堅壁溝が巡る。主柱穴の一部と考えられるピットが2基確認された。南壁近くで検出されたピットは、貯蔵穴・昇降施設に伴うものである可能性が考えられる。覆土 しまった暗褐色土・黒褐色土を主体とする。部分的に As-A混土の擾乱が認められ、一部は床面まで達している。炉 北寄りに検出されている。円形に浅く掘

り込み、南に炉石を伴う。遺物 検出部全域から壺・甕・高杯等が出土している。時期 後期樽式期と考えられる。



第8図 Y-3号住居址



第9図 Y-3号住居址出土遺物(1)



第10図 Y-3号住居址出土遺物(2)

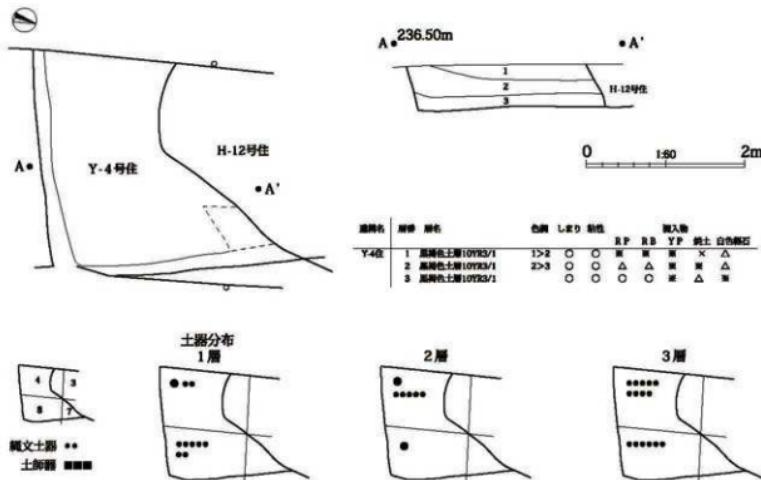
Y-3号住居址

番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成 ②色斑 ③鉛石 ④残存 ⑤良好 ⑥黄褐色 ⑦白閃石、茶褐色紋 ⑧鉛部下位～鉛部 ⑨底径 10.1 ⑩高さ <3.1>	成・整形技法の特徴
1	赤生土器 蓋又は蓋	4区1層 No.4	口径 底径 高さ	①良好 ②黄褐色 ③白閃石、茶褐色紋 ④鉛部下位～鉛部 10.1 <3.1>	外面 鉛部側～斜位削面で、底部削て。表面荒れ剥離。 内部 鉛部削面で、底部削て。
2	赤生土器 台付蓋	1区1層 1区3層 No.1	口径(13.6) 底径 高さ	①良好 ②黄褐色 ③石英、黑色粒、白色粒 ④口縁部～鉛部 13.6 <1.4>	外側 口縁部～環状面で後波文2脱。鉛部2適正削離裏状文。 内部 鉛部削面で、表面荒れやや剥離。 内面 鉛部削面～鉛部削面で。
3	赤生土器 高环	1区3層 No.2 No.3	口径(15.4) 底径 高さ	①良好 ②にぶい黄褐色 ③黑色粒、チャート、白色粒 <2.2> ④鉛部1/3	外側 口縁部～環状面で～横・鉛磨き。 内部 口縁部～外部削面で～横・鉛磨き。
4	赤生土器 ミニチュア	P-1	口径 底径 高さ	①良好 ②にぶい黄褐色 ③チャート、角閃石、黑色粒、白色粒 <4.6> ④ほぼ完形	外側 口縁部～底削面。 内部 口縁部～底削面。
5	赤生土器 蓋	ベルト	口径 底径 高さ	①良好 ②にぶい褐色 ③砂粒、黑色粒 ④口縁部破片 <4.5>	外側 折り返し口縁。單刃R L 線文模様がし。 内部 横方向荒磨き。
6	赤生土器 蓋	2区1層	口径 底径 高さ	①良好 ②浅黄褐色 ③砂粒、黑色粒 ④鉛部上位破片 <3.0>	外側 擦挫状工具による平行沈籠を羽状に施す。 内部 横方向荒磨き。
7	赤生土器 蓋	6区1層	口径 底径 高さ	①良好 ②浅黄褐色 ③砂粒、黑色粒 ④鉛部上位破片 <3.8>	外側 擦挫状工具による平行沈籠を斜め方向に施す。 内部 横方向荒磨き。
8	赤生土器 蓋	1区1層	口径 底径 高さ	①普通 ②灰褐色 ③砂粒、白色粒 ④口縁部破片 <3.7>	外側 擦挫状工具による波状文。
9	赤生土器 蓋	1区1層	口径 底径 高さ	①普通 ②にぶい褐色 ③砂粒、黑色粒 ④口縁部破片 <4.4>	外側 擦挫状工具による波状文。 内部 横方向荒磨き。
10	赤生土器 蓋	2区1層	口径 底径 高さ	①普通 ②にぶい褐色 ③砂粒、黑色粒 ④鉛部破片 <3.5>	外側 擦挫状工具による波状文。 内部 横方向荒磨き。
11	赤生土器 蓋	2区1層	口径 底径 高さ	①良好 ②褐色 ③砂粒、黑色粒 ④口縁部破片 <3.1>	外側 擦挫状工具による波状文。 内部 横方向荒磨き。
12	赤生土器 蓋	2区2層	口径 底径 高さ	①良好 ②赤褐色 ③砂粒、黑色粒 ④鉛部破片 <2.7>	外側 赤褐色。擦挫状工具による横位平行沈籠。遺存部石端に 「止め」が確認できる。 内部 赤色旋彩。
13	赤生土器 蓋	ベルト	口径 底径 高さ	①良好 ②赤褐色 ③砂粒、黑色粒 ④鉛部上位破片 <4.9>	外側 擦挫状工具による波状文。
14	赤生土器 高环	6区1層	口径 底径 高さ	①良好 ②赤褐色 ③砂粒、黑色粒 ④口縁部～鉛部上位破片 <3.4>	外側 口縁部外反する。 内部 横方向～斜め方向削面で。一部荒磨き。 外側 横方向荒磨き、赤色旋彩。 内部 横方向荒磨き、赤色旋彩。

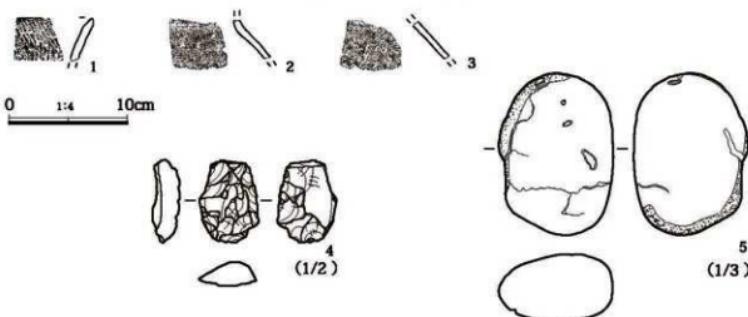
第3表 Y-3号住居址出土遺物観察表

③Y-4号住居址（第11・12図、第4表、PL. 8・11）

位置 L区南寄り、5D 12グリッド他に位置する。北側が後出するH 12号住居址と重複する。形状・特徴 長方形住居址の南東コーナー付近を検出したと想定される。東西不明（確認部分 2.7m）×南北不明（確認部分 2.8m）×深さ 0.6m。柱穴・壁周溝等の施設は検出されていない。覆土 しまった黒褐色土を主体とする。自然堆積と想定される。炉 検出されていない。遺物 検出部全域から、壺・甕・石器等が一定量出土している。調文土器片・土師器片が混入している。時期 後期縄式期と考えられる。



第11図 Y-4号住居址



第12図 Y-4号住居址出土遺物

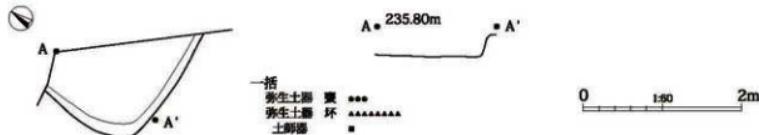
Y-4号住居址

番号	器種	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 ①良好 ②にほい褐色 ③砂粒・ 粘土・黑色粒 ④口縁部破片	成・整形技法の特徴	
1	赤生土器 甕	8区1層	口径 底径 高さ	— — <3.5cm	外面 基盤R.L.横文模範がし。 内面 横方向壓磨。	
2	赤生土器 甕	4区2層	口径 底径 高さ	— — <4.0cm	①普通 ②にほい褐色 ③砂粒 ④底部～胴部上位破片	外面 球頭、柳歯状工具による波状文。胴部、同工具による 波状文。 内面 横方向壓磨。
3	赤生土器 甕	8区2層	口径 底径 高さ	— — <4.1cm	①良好 ②浅黄褐色 ③砂粒・ 白色粒、角閃石 ④胴部上位破 片	外面 柳歯状工具による波状文。遺存部上端には横位沈殿？ 難定文か？ 内面 横方向壓磨。一部に縱方向壓磨。
番号	器種	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②石材 ③残存 ① — ②チャート ③完形	成・整形技法の特徴	
4	リタッヂ ドフレイ ク	4区2層	長さ 幅 厚さ 重量	3.50 2.50 1.00 8.90	背面に2次加工が施される。石巒の未完成か？	
5	磨石	一括	長さ 幅 厚さ 重量	10.30 7.30 4.20 386.78	裏面に摩耗痕が認められる。被磨による変色や磨削痕あり。	

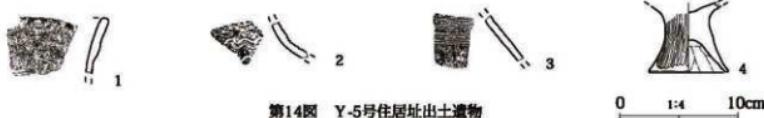
第4表 Y-4号住居址出土遺物観察表

④Y-5号住居址(第13・14図、第5表、PL.9~11)

位置 M区北寄り、5D 34グリッドに位置する。形状・特徴 長方形住居址の南西コーナー付近を検出したと想定される。東西不明(確認部分1.7m)×南北不明(確認部分1.5m)×深さ0.3m。柱穴・壁周溝等の施設は検出されなかった。覆土 黒褐色土を主体とする。炉 検出されていない。遺物 瓦・高坏等が出土している。また、土器も少量混入している。時期 後期縄文期と考えられる。



第13図 Y-5号住居址



第14図 Y-5号住居址出土遺物

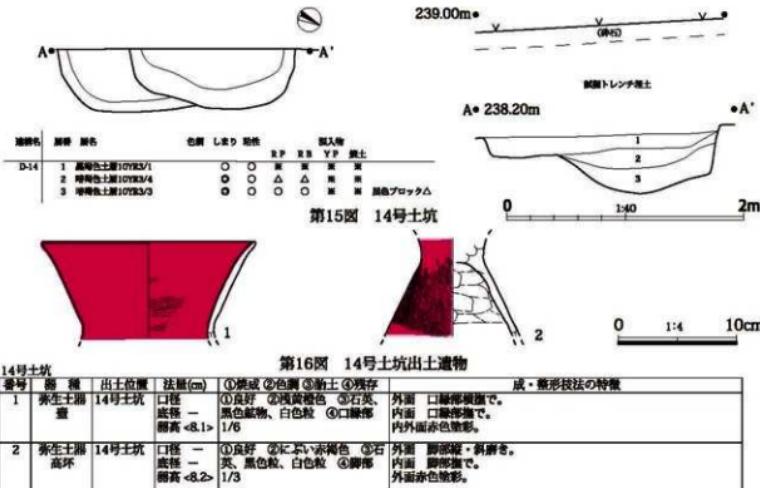
番号	器種	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 ①良好 ②にほい褐色 ③砂粒・ 粘土・黑色粒 ④口縁部・頸部 破片	成・整形技法の特徴		
1	赤生土器 甕	Y-5甕土	口径 底径 高さ	— — <4.8cm	外面 橫方向壓磨で、頸部の一部に横位沈殿、難定文。 内面 橫方向壓磨。		
2	赤生土器 甕	Y-5甕土	口径 底径 高さ	— — <3.5cm	①良好 ②浅黄褐色 ③砂粒・ 黑色粒 ④胴部上位 破片	外面 柳歯状工具による複雑な波状文。一部に同工具による斜位 平行沈殿。 内面 橫方向壓磨。	
3	赤生土器 甕	Y-5甕土	口径 底径 高さ	— — <4.0cm	①普通 ②浅黄褐色 ③砂粒 ④胴部上位破片	外面 柳歯状工具による平行沈殿を横位・縦位に施す。いわゆる T字文か。 内面 一部剥離があり不明瞭。難定文。	
4	赤生土器 高坏	Y-5甕土	口径 底径 高さ	— (6.7) <5.8cm	①良好 ②にほい褐色 ③石 英・チャート、白色粒、白色粒 ④脚部	外面 剥離延續。	内面 剥離物。

第5表 Y-5号住居址出土遺物観察表

(2) 土坑

① 14号土坑 (第15・16図、第6表、PL.5・11)

位置 I区、4C05グリッド他に位置する。形状・特徴 調査区の関係から全体を調査していない。北半が深く、セクションより2基の土坑の重複である可能性も考えられる。長軸 2.0m × 短軸不明 (確認部分 1.0m) × 深さ 0.5m 覆土 しまった黒褐色土・暗褐色土を主体とする。遺物 壺・高坏等が出土している。時期 後期樽式期と考えられる。



第3節 古墳時代

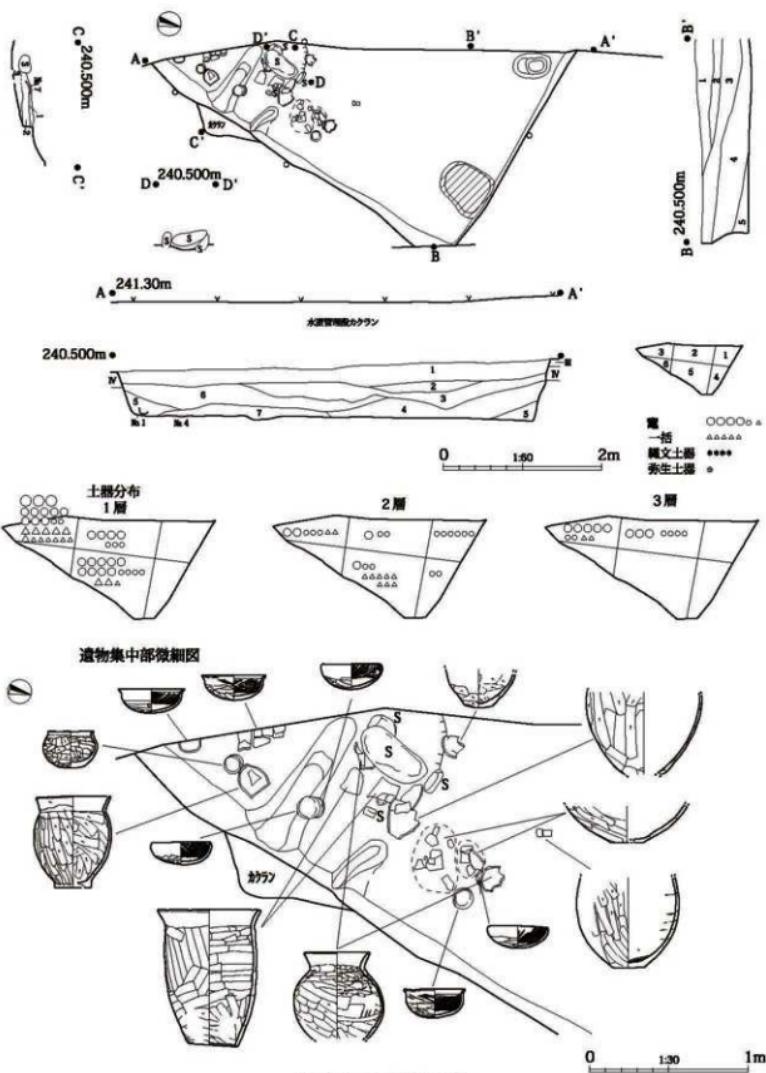
(1) 穴穴住居

① H-8号住居址 (第17~20図、第7・8表、PL.2・3・11・12)

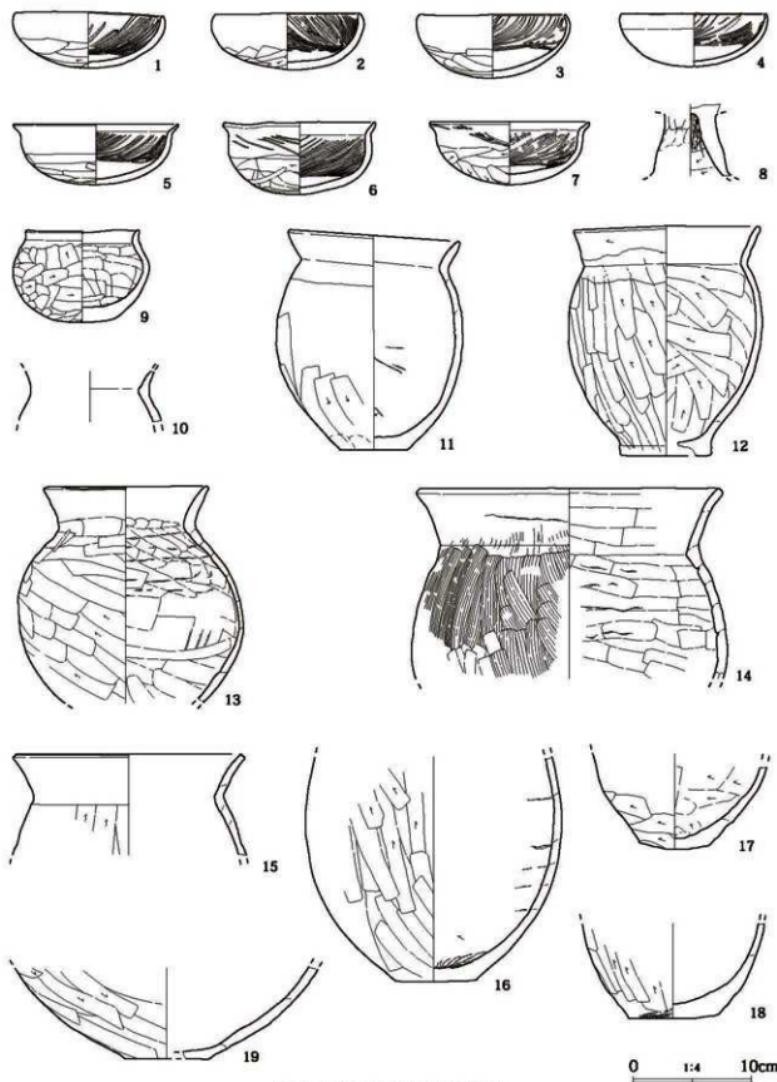
位置 G区、2B86グリッド他に位置する。形状・特徴 方形基調住居址の北東部を検出したと想定される。東西不明 (確認部分 3.1m) × 南北不明 (確認部分 4.4m) × 深さ 0.7m。北壁付近にピットが検出された。覆土 しまった黒褐色土を主体とする。自然堆積と想定される。カマド 東壁に確認されている。長めの補部を有し、煙道は短い。焼き口の堅果石と想定される石が出土している。遺物 カマド周辺を中心に、壺・高坏・壺・瓶等多くの遺物が出土している。時期 5世紀後半と考えられる。

基準名	層番 層名	色調	しまり 性状	胎入物				備考
				X.F	X.B	Y.F	胎土	
H-8号	1. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	△	△	△	△	
	2. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	△	△	△	△	
	3. 黒褐色土層 (0.7m)	1>3	○	○	△	△	△	
	4. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	○	○	△	△	
	5. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	○	△	△	△	
	6. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	○	△	△	△	
	7. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	△	△	△	△	H-8の側壁上か?
	8. 黒褐色土層 (0.7m)	1<2	△	○	△	△	△	
	9. 黒褐色土層 (0.7m)	○	○	△	△	△	△	

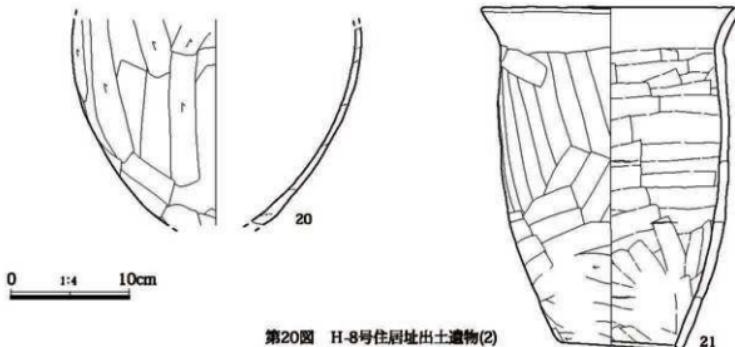
第17図 H-8号住居址(1)



第18図 H-8号住居址(2)



第19図 H-8号住居址出土遺物(1)



第20図 H-8号住居址出土遺物(2)

21

H-8号住居址

番号	器種	出土位置	法蓋(cm)	①焼成 ②色調 ③土色 ④残存 物、赤褐色、白色粒 ⑤光沢	表面・施形技法の特徴
1	土師器 外	No.15	口径 12.4 底径 7 高 4.7	①良好 ②明赤褐色 ③黑色 物、赤褐色粒、白色粒 ④光沢	外面 口縁部模様で、体部～底部削り。 内面 口縁部～底部削り→斜削き。
2	土師器 环	No.5	口径 12.1 底径 7 高 4.8	①良好 ②明赤褐色 ③黑色 物、赤褐色粒、白色粒 ④ぼぼ 穴形	外面 口縁部模様で、体部～底部削り。 内面 口縁部～底部削り→斜削き。
3	土師器 环	No.6	口径 12.2 底径 7 高 5.4	①良好 ②明赤褐色 ③石英、 黒色藝術、白色粒 ④光沢	外面 口縁部模様で、体部～底部削り。 内面 口縁部～底部削り→斜削き。
4	土師器 环	3区3層 3区	口径 12.1 底径 7 高 4.5	①良好 ②明赤褐色 ③黑色 物、赤褐色粒、白色粒 ④1/3	外面 口縁部模様で、体部～底部削り→粗い削で。 内面 口縁部～底部削り→斜削き。
5	土師器 环	No.1	口径 13.8 底径 7 高 5.1	①良好 ②明赤褐色 ③石英、 黒色藝術、赤褐色、白色粒 ④ぼぼ穴形	外面 口縁部～体部上半横削で、体部下半～底部削り。 内面 口縁部模様で、体部～底部削り→斜削き。
6	土師器 环	No.16	口径 12.7 底径 7 高 6.1	①良好 ②褐色 ③石英、黒色 藝術、白色粒 ④ぼぼ穴形	外面 口縁部～体部上半横削で→斜削き。体部下半～底部削 り。 内面 口縁部模様で、体部～底部削り→斜削き。
7	土師器 环	No.4	口径 13.4 底径 7 高 5.3	①良好 ②明赤褐色 ③石英、 黒色藝術、赤褐色粒、白色粒 ④1/2	外面 口縁部～体部上半横削で→斜削き。体部下半～底部削 り。 内面 口縁部模様で→斜削き。
8	土師器 高环	2区2層	口径 7 底径 <6.0 高 6.0	①普通 ②褐色 ③砂砾、白 色・黒色粒、金剛母片 ④脚部 (立ち上がり) のみ1/3程度残 る。	外面 脚部上半に指押さえを行う。 内面 脚部下半に削り削り。
9	土師器 小型盤	No.2	口径 9.4 底径 7 高 7.7	①良好 ②灰褐色 ③石英、角 閃石、白色粒、小砾(4~6mm) ④光沢	外面 口縁部模様で、脚部上位削り→中～下位削・斜削り。 内面 口縁部模様で、脚部横削で、底部難削で。
10	土師器 小型盤	2区2層 5区3層	口径 7 底径 <4.2 高 4.2	①普通 ②褐色 ③砂砾、白 色・黒色粒 ④脚部付近のみ 1/3、他は全て欠損する。	外内面ともに横方向削で。
11	土師器 甕	3区3層 5区3層 甕	口径(14.2) 底径 7.5 高 17.6	①良好 ②にいし褐色 ③砂 砾、黒色粒、チャート 片、角閃石 ④口辺～体部は約 1/2、底部はぼぼ穴形	外面 体部難削り、底部近くは指押さえを行う。 脚部以外は横削で。 内面 不規則方向に斜削で後、指捺で(もしくは布捺)。 脚部以外は横削で。
12	土師器 甕	3区3層 No.3	口径 15.3 底径 7.5 高 19.3	①良好 ②黄褐色～暗褐色 ③砂砾、白色粒、チャート 片、海綿骨針 ④口辺部 1/3・体部1/2	外面 下～上向きの斜削り、脚部付近は横方向削で。 内面 反時計回り方向に、右下～左上の旋で(布捺で?)。 底部の穿孔は、焼成後行っている。
13	土師器 甕	5区3層 No.7 No.14	口径 13.5 底径 7 高 <18.2 位1/2	①普通 ②にいし黃褐色 ③石 英、白色粒 ④口縁部～脚部下 位1/2	外面 口縁部模様で、脚部横削で→上位横削で。 内面 口縁部模様で→上位斜削で。 外内面脚部焼成時の温度あり。内面削部は上位熱吸込み現象。

第7表 H-8号住居址出土遺物觀察表(1)

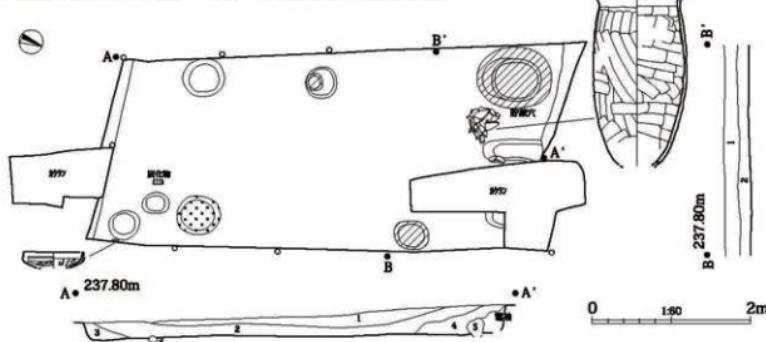
H-8号住居址

番号	層 数	出土位置	佐藤(cm)	成・藍形鉄法の特徴	
				①表面	②裏面
14	土師器 表	2区3層 3区3層 5区2層	口径(25.0) 底径(16.0) 高さ<16.0	①良好 ②にぶい黄褐色 英、白色粒、黒色粒 ④口縁部 に調節上平1/6	外面 口縁部横削で、底部横削毛→横削で。肩部縫・鋸削毛。 内面 口縁部横削で、底部横削毛で。 内面部に輪状み痕明瞭。
15	土師器 表	3区2層 3区3層	口径(19.0) 底径(8.5) 高さ<8.5	①良好 ②にぶい黄褐色 砂、白色・黒色粒 ④口縁~ 体部上半1/4程度それ以外は欠 損する。	外面 体部側削り、肩部以外は横削で。 内面 横方向削毛で。
16	土師器 表	3区 No10 No17	口径(6.0) 底径(4.0) 高さ<19.0	①良好 ②にぶい黄褐色 砂、白色・黒色粒 ④口縁~ 体部上半1/4程度それ以外は欠 損する。	外面 下→上方向削り。 内面 縦方向削毛で。
17	土師器 表	2区2層 3区3層 No11	口径(5.8) 底径(6.0) 高さ<8.1	①良好 ②にぶい黄褐色 砂、白色・黒色粒、チャート片 ③底部は 空存、体部は下半分を残る。そ れ以外は欠損。	外面 縦方向削り。 内面 縦削り。底近くは指揮され。 外面部は丸くやや座りが悪い。
18	土師器 表	3区 No8	口径(7.6) 底径(4.0) 高さ<8.0	①良好 ②にぶい赤褐色 砂、白色・黒色粒 ④底部1/10、底部4/5	外面 縦方向削り。調節最下位は横方向削り。 内面 不整方向削毛で。
19	土師器 表	No12 No13	口径(7.0) 底径(7.7) 高さ<17.4	①普通 ②褐色 ③砂、白 色・黒色粒、チャート片 ④底 部1/3体部下半1/5程度。それ以 外を欠損する。	外面 細め方向削り。 内面 縦方向削毛で。
20	土師器 表	5区1層 No10	口径(5.8) 底径(4.5) 高さ<17.4	①普通 ②にぶい黄褐色 砂、白色・黒色粒、チャート粒 ④体部下位~下半分の1/2程度 残存する。体部上半及び底部は 欠損する。	外面 下→上方向削り。 内面 縦方向削毛で後、不規則方向に指揮で。
21	土師器 表	3区3層 5区3層 No7 No9 等	口径(21.1) 底径(10.0) 高さ(28.9)	①良好 ②浅黄色 ③石英、白 色粒、黒色粒 ④3/4	外面 口縁部横削で、肩部縫削り→下半側・鋸削り。 内面 口縫部横削で、底部横削毛で→下位斜削毛で→下端部 横削り。

第8表 H-8号住居址出土遺物観察表(2)

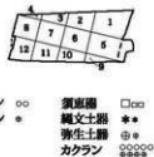
②H-9号住居址 (第21~23図、第9表、PL.5・6・12)

位置 J区、4C 27グリッド他に位置する。形状・特徴 南北に主軸を持つ、方形基調住居址と想定される。東西不明 (確認部分 2.7m) ×南北 5.5m ×深さ 0.4m。北壁側にカマド、カマドの西に貯蔵穴が確認されている。また、南壁付近からは炭化物が出土している。覆土 しまった暗褐色土・黒褐色土を主体とする。カマド 北壁側で確認されている。長めの袖部を有する。中央部が搅乱に接されており、詳細は不明。遺物 住居址全体から土師器表・模倣瓦・須恵器長頸壺等が出土している。赤生土器片も混入している。時期 6世紀半ばと考えられる。

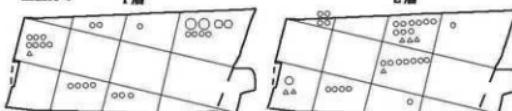


第21図 H-9号住居址(1)

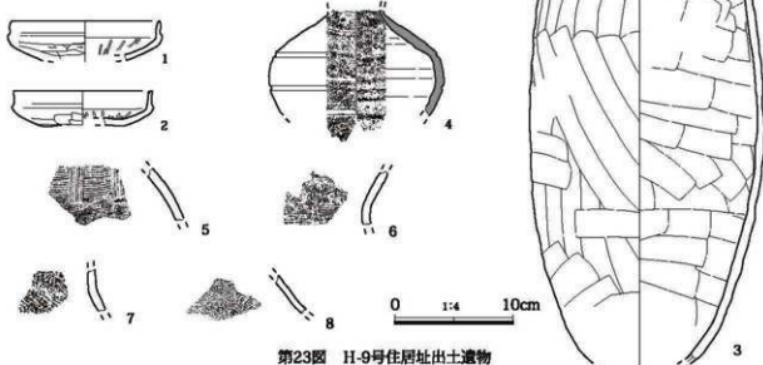
遺跡名	層番 層名	色調	しまり 細粒	埋入物				備考
				MF	MR	YF	黒土	
H-9号	1 高周波土層 10793/1	○	×	×	×	×	△	
	2 高周波土層 10793/2	○	△	△	△	△	■	
	3 高周波土層 10793/3	○	○	△	△	△	■	
	4 高周波土層 10793/4	○	○	○	△	△	■	



土器分布 1層



第22図 H-9号住居址(2)



第23図 H-9号住居址出土遺物

H-9号住居址

番号	器種	出土位置	法面(cm)	成・整形技法の特徴			
				①模成・②色調・③筋・④残存	外側	内面	裏面
1	土器環	No.2	口径(12.5) 底径 — 高さ <3.4	①良好 ②黒褐色 ③白色粒 ④口縁部～体部中位破片	口縫形模擬で、体部削り。		
2	土器環	2区2層	口径(11.7) 底径 — 高さ <2.9	①普通 ②にいし黄褐色 ③砂礫・白色粒 ④口縁部～体部中位破片	口縫形模擬で、体部削り。	口縫形模擬で、体部放射状荒廻り。	
3	土器環	No.1	口径(20.0) 底径 — 高さ <36.7 位は底元形	①普通 ②褐色 ③片岩、石英、白色粒 ④口縁部～胴部下位	口縫形模擬で、胴部縱割り→下半模擬で。	口縫形模擬で、胴部縱割りで、外側	口縫形模擬で、胴部縱割りで、外側
4	須恵器 長縫縫	2区2層	口径 — 底径 — 高さ <4.8	①良好 (薄元) ②灰色 ③砂礫・白色粒 ④胴部上位 位は底元形	口縫形	口縫部上位に2条の横位沈縫。中位最大径付近にも2条の横位沈縫を添らす。比較例には条縫を複数。	
5	須恵器 縫縫	4区2層	口径 — 底径 — 高さ <4.5	①普通 ②にいし黄褐色 ③砂礫・白色粒 ④胴部上位 位は底元形	表面	縫縫状工具による平行沈縫を横位に施文後、同工具による縫位平行沈縫で区隔。	
6	須生土器 縫縫	1区1層	口径 — 底径 — 高さ <4.4	①普通 ②褐色 ③砂粒・黒色粒 ④口辺部～胴部破片	表面	縫縫間に「二重止」縫状文。	
7	須生土器 縫縫	11区2層	口径 — 底径 — 高さ <3.4	①良好 ②にいし黄褐色 ③砂粒・白色粒 ④口辺部～胴部上位 位は底元形	表面	縫縫間に「二重止」縫状文。	
8	須生土器 縫縫	カクラン	口径 — 底径 — 高さ <3.3	①良好 ②にいし黄褐色 ③砂粒・白色粒 ④胴部上位破片	表面	縫縫状工具による被状文。被状モチーフが亂れている。	

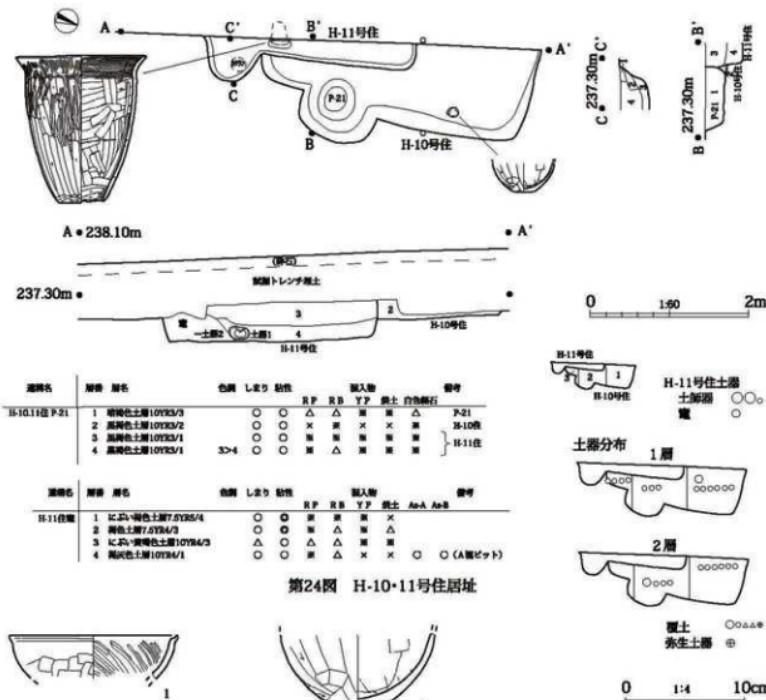
第9表 H-9号住居址出土遺物編索表

③H-10号住居址（第24・25図、第10表、PL. 6・7・12）

位置 K1区、4C 59グリッド他に位置する。H-11号住居址と重複している。形状・特徴 住居址の東半部を検出したと想定される。南半部は後出するH-11号住居址に接されている。東西不明（確認部分 1.2m）×南北 3.4m ×深さ 0.2m。東壁側の突出部は後出するピットであり、カマドではない。隅丸方形基調住居址と想定される。覆土 しまった黒褐色土を主体とする。カマド 検出されていない。遺物 確認部分全域から、土師器壺・甕等が出土している。時期 5世紀後半と考えられる。

④H-11号住居址（第24・26図、第11表、PL. 6・7・13）

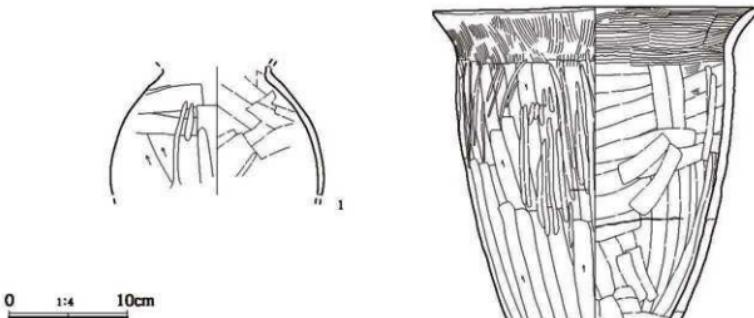
位置 K1区、4C 60グリッド他に位置する。H-10号住居址と重複している。形状・特徴 住居址の北東部を検出したと想定される。検出部分が狭小であり、詳細は不明。東西不明（確認部分 0.4m）×南北不明（確認部分 2.7m）×深さ 0.5m。床面は、H-10号住居址より約 0.2m 深く掘り込み構築されている。覆土 しまった黒褐色土を主体とする。カマド 東壁に付設されている。煙道は壁外に急角度で立ち上がる。煙道と燃焼部の一部が検出されているだけであり、詳細については不明。遺物 土師器壺・甕等が出土している。時期 6世紀半ばと考えられる。



H-10号住居址

番号	器種	出土位置	法規(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・特徴
1	土器器 环	2区2層	口径(14.2) 底径 一 壁高 <3.6>	①良好 ②赤褐色 ③砂質 ④口縁部～体部中央破片	外面 口縁部～体部上位削り、体部中央横方向削り。 内面 口縁部剥離で、体部放状剥離。
2	土器器 環	No.1	口径 一 底径 4.5 壁高 <6.1>	①良好 ②赤褐色 ③砂質・白 色粒、片岩、葉片片 ④胴部下 部～底部破片	外面 褶部～位削り 内面 放状剥離。

第10表 H-10号住居址出土遺物観察表



第26図 H-11号住居址出土遺物

H-11号住居址

番号	器種	出土位置	法規(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・特徴
1	土器器 環	電	口径 一 底径 一 壁高 <10.8>	①良好 ②褐色 ③砂質・泥質 ④頭部上～中央破片	外面 烧成基部削り、一部に剥離。 内面 不整方向削離。
2	土器器 環	No.1	口径 27.1 底径 一 壁高 31.1	①良好 ②褐色 ③石英、白色 粒、黒色粒、赤褐色粒 ④ほぼ 完形	外面 口縁部削離で→縫隙毛。胴部縦削り→上半部・斜削り。 下端削り。 内面 口縁部削離で→横削毛。胴部横・縦削離で→下端削り。

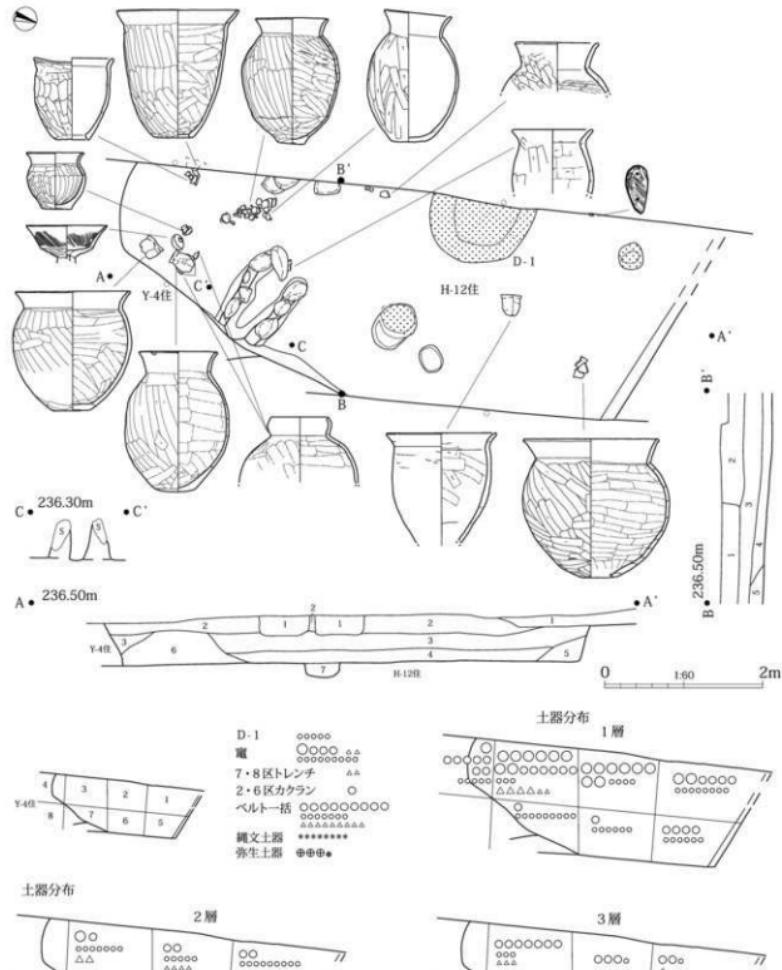
第11表 H-11号住居址出土遺物観察表

⑥H-12号住居址（第27～31図、第12・13表、PL. 8・9・12～14）

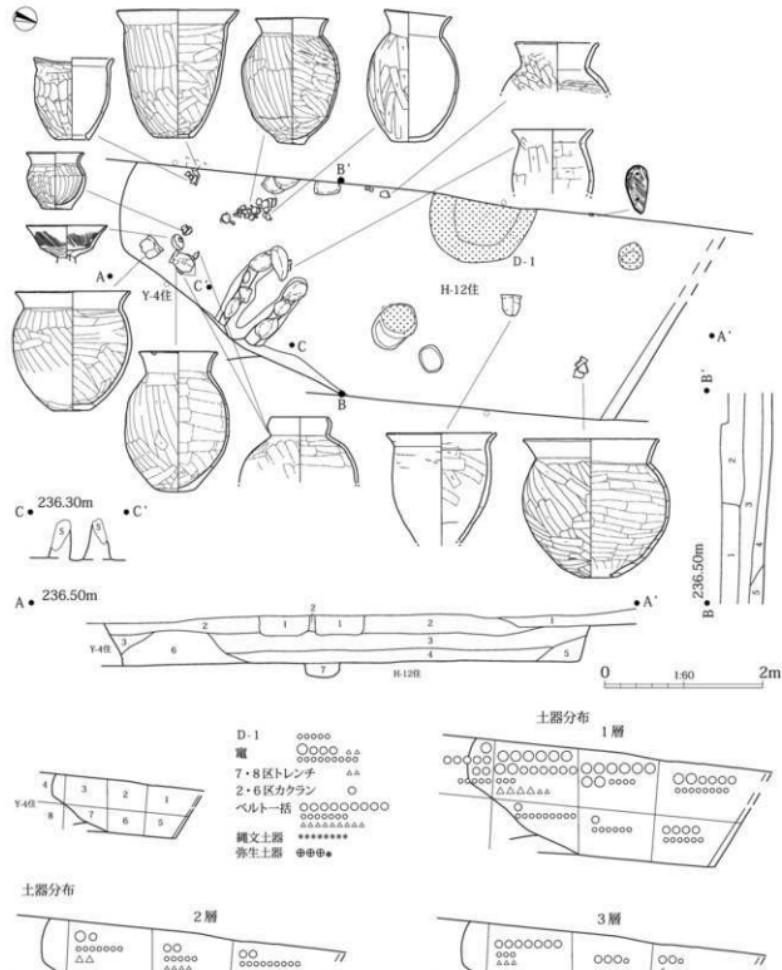
位置 L区、5D01グリッド他に位置する。南東部分がY4号住居址と重複する。形状・特徴 全体を確認していないが、隅丸方形基調住居址と想定される。東西不明（確認部分4.0m）×南北6.9m×深さ0.6m。比較的規模の大きい住居址である。覆土 しまった暗褐色土を主体とする。自然堆積と想定される。カマド 東壁に付設されている。扁平な石を並べて袖部を構築する特異な形状である。焚き口の懸架石も確認されている。カマドの詳細については、「第5章 成果とまとめ」で報告する。遺物 土器器壺・高壺・壺・瓶等、多量の遺物が住居址全体から出土している。また、石製模造品（滑石製）・砥石（流紋岩製）が出土している。時期 5世紀半ばと考えられる。

遺物名	解説	形状	色調	しまり	胎性	入出物	地質				番号
							R.F	R.B	T.F	土性	
H-12位	1 暗褐色土壘10782/2	○	×	○	○	○	○	○	×	△	Aa-Ac, Ab-Bd (A底土D)
	2 暗褐色土壘10782/2	○	○	○	△	△	△	△	△	△	
	3 暗褐色土壘10782/3	△	○	○	○	△	△	△	△	△	BP2層より少ない
	4 暗褐色土壘10782/3	○	○	○	△	△	△	△	△	△	
	5 にじく赤褐色土壘10784/3	○	○	○	○	○	○	○	○	△	
	6 暗褐色土壘7.5782/4	○	○	△	△	△	△	○	○	△	地層
	7										

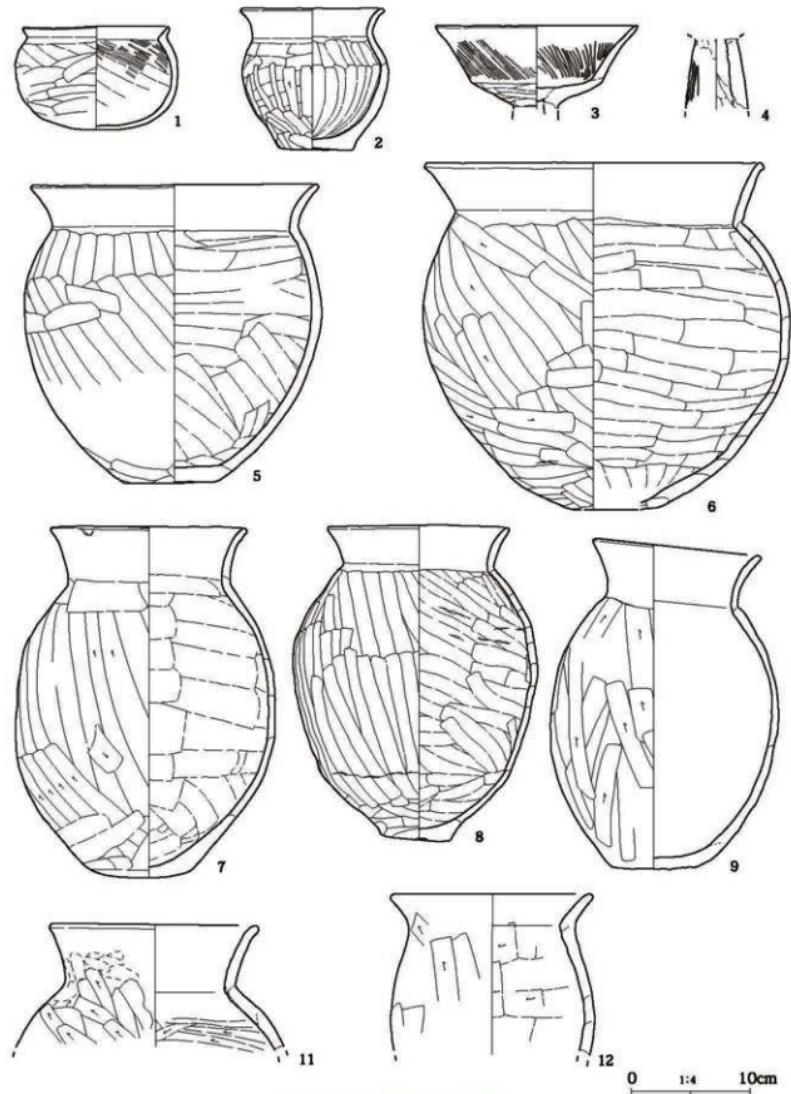
第27図 H-12号住居址(1)



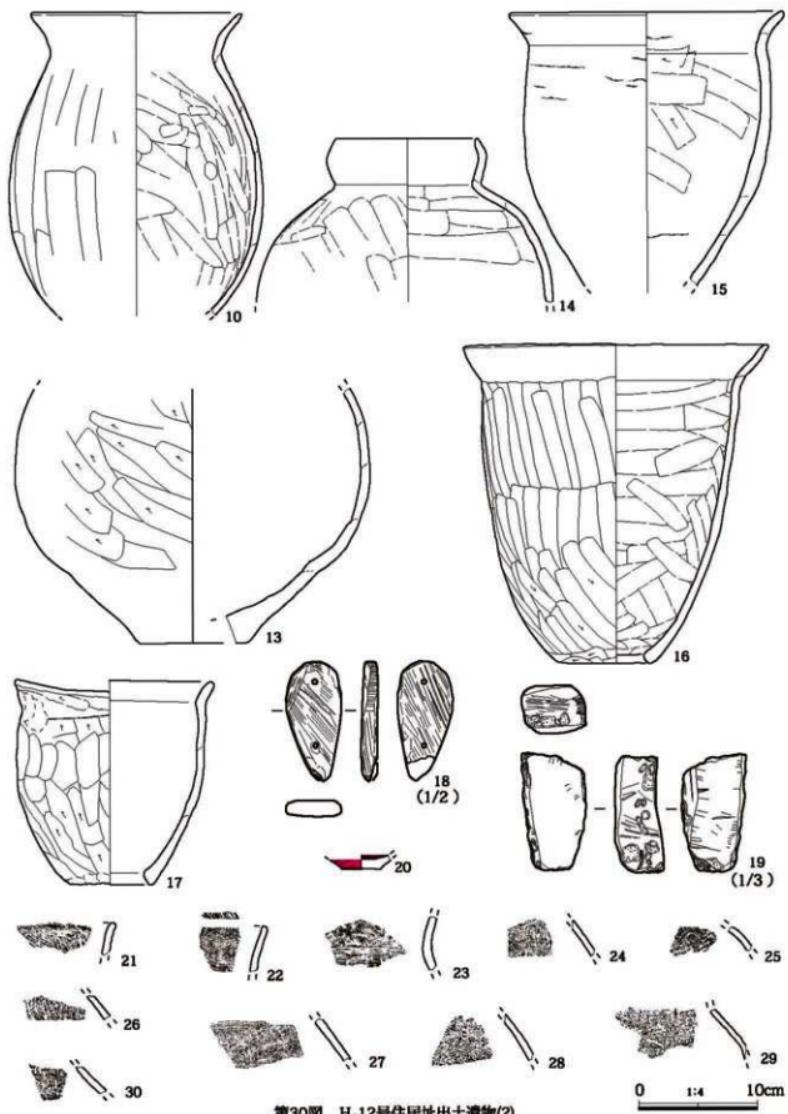
第28図 H-12号住居址(2)



第28図 H-12号住居址(2)



第29図 H-12号住居址出土遺物(1)



第30図 H-12号住居址出土遺物(2)



第31図 H-12号住居址出土遺物(3)

0 1:4 10cm

H-12号住居址

番号	器種	出土位置	法面(cm)	①焼成②色調③出土④残存 状況	成・削形技術の特徴	
1	土師器 小型甕	3区2層 3区3層 7区2層	口径 12.1 底径 一 高さ 8.7	①良好 ②赤褐色 ③石英、黒色粒 ④口縁部へ剥離一部欠損	外面 口縁部削撫で、底部上位剥離面で→中→下位削り・鋸削り。 底部削り。 内面 口縁部削撫で、底部剥離面で→上位削離を。底部削離。 外面部は被覆による表面剥離観察。	
2	土師器 小型甕	No.4	口径(11.8) 底径 6.0 高さ 11.9	①良好 ②橙色 ③石英、黒色 粒、白色粒、小繊(3~6mm) ④口縁部へ剥離1/2欠損	外面 口縁部削撫で、底部剥離面で→鋸削り、下位削削り。 底部削り。 内面 口縁部削撫で、底部剥離面で→鋸削り、下位削削り。 底部削り。	
3	土師器 高环	No.3	口径(16.8) 底径 7.0 高さ >7.0	①良好 ②橙色 ③石英、角閃 石、白色粒、赤褐色粒 ④环 部のみ。口縁部3/4欠損	外面 口縁部削撫で→削離を。环部剥離面。 内面 口縁部削撫で→削離を。环部剥離面。 内环部底部は剥離削離。	
4	土師器 高环	3区	口径 一 底径 一 高さ >5.9	①普通 ②橙色 ③砂砾、白 色・黒色粒、角閃石、チャート 粒 ④脚部上端から下端までお よそ1/2程度残るが剥離部分は 全く欠損する。	外面 斜方向削離を。上端部は指揮さえ。 内面 剥離で、指揮。	
5	土師器 甕	3区3層 No.5 底	口径 23.9 底径 7.8 高さ 25.0	①普通 ②橙色 ③石英、白色 粒、黒色粒 ④側部1/4欠損	外面 口縁部削撫で、底部削削り→上半→下位削削り。底部削り。 内面 口縁部削撫で、底部上半部削離面で→下半部削撫で。 底部削離。	
6	土師器 甕	5区1層 5区3層 No.12	口径(28.1) 底径 7.5 高さ 1/2	①普通 ②橙色 ③石英、黑色 粒、赤褐色粒 ④口縁部へ底部 1/2	外面 口縁部削撫で、底部削削り。底部削り。 内面 口縁部削撫で、底部削離面で→下位削撫面。 底部削離位に粗広の窓が、下端に早い壊状の痕跡が付着。	
7	土師器 甕	3区2層 No.1	口径 29.7 底径 一 高さ 16.1	①普通 ②橙色 ③石英、白色 粒子 ④ほぼ完形	外面 口縁部削撫で、底部削削り→上位・下位削撫。 内面 口縁部削撫で、底部削撫。	
8	土師器 甕	3区3層 No.8	口径 15.1 底径 5.9 高さ 26.7	①良好 ②橙色 ③石英、白色 粒(4~6mm)、赤褐色 粒 ④1/2	外面 口縁部削撫で、底部削削り→下位削撫り。底部削り。 内面 口縁部削撫で、底部削撫で、底部削撫。	
9	土師器 甕	No.8	口径 13.8 底径 7.0 高さ 27.6	①普通 ②にぶい黄褐色・褐色 (底部近辺には被熱している) ③砂砾、白色・黒色粒、チャート粒 ④口縁部を剥離にせば ⑤ 底部より上は1/8程度、体部上 半は1/4程度残る。底部上半は が底部は欠損する。	外面 底部より上は横方向削削り。底部より上は横削。 内面 削削り後、反時計回り方向に旋削。	
10	土師器 甕	7区2層 底 ベルト	口径(17.4) 底径 一 高さ <25.6	①普通 ②橙色 ③砂砾、白 色・黒色粒、チャート粒・炭化 灰(赤褐色)を剥離にせば ④ 底部より上は1/8程度、体部上 半は1/4、下半は僅かに残るが 底部は欠損する。	外面 体部は下→上方向の削削り、底部より上は横削。 内面 横方向削削で、底部より上は横削。	
11	土師器 甕	2区3層 No.10	口径 17.2 底径 一 高さ <10.5	①良好 ②橙色 ③砂砾、白 色・黒色粒、チャート粒・炭化 灰(赤褐色)を剥離にせば ④ ⑤口縁部から底部上位1/5 程度が剥離する。口縁部は一部 欠損している。底部中位以下は 全く欠損する。	外面 底部より下は斜め方向削削り、底部より上は指揮さえ。 内面 斜め方向削削で、底部より上は横削。 底部には粘土による被熱を行う。	
12	土師器 甕	3区3層 No.14	口径(16.5) 底径 一 高さ >13.6	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂 砾、白色・黒色粒、チャート粒 ④口縁部1/8、底部へ体部上 半は1/4程度残るがそれ以下は 全く欠損する。	外面 体部縦(下→上)方向削削り後、底部より上は横方向 削削。	内面 体部縦(反時計回り)方向削削で後、底部より上は 横削。
13	土師器 甕	3区1層 3区2層 底	口径 一 底径(9.0) 高さ >21.5	①普通 ②にぶい橙色 ③砂 砾、白色・黒色粒、チャート粒 ④口縁部1/8、底部へ体部上 半は1/3程度、底部は1/5程度残る ⑤チャート粒による ⑥体部上半は 全て欠損する。体部下半は1/3 程度、底部は1/5程度残る	外面 反時計回り方向に削削り。 内面 削削り後、底部中位指揮さえと下→上方削。粘土 被熱が結合部が断層に残る。	
14	土師器 甕	No.1 No.2	口径 12.0 底径 一 高さ <11.8	①普通 ②橙色 ③砂砾、白 色・白色粒 ④口縁部はほ ぼ完形。底部以下は欠損	外面 体部は右下→左上方削離で。底部より上は横削。 内面 いずれも反時計回り。 横方向削削。(反時計回り)。	

第12表 H-12号住居址出土遺物観察表(1)

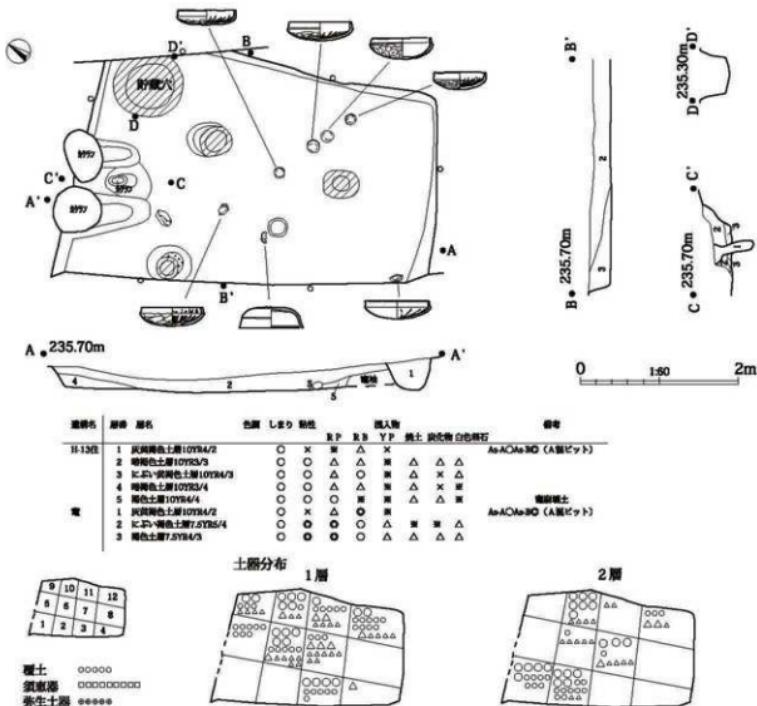
H-12号住居址

番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成 ②色斑 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴
15	土師器 甕(底部 穿孔有 無とて 能い か?)	No.11	口径 22.7 底径 7.8 高さ<23.8>	①普通 ②褐色 ③砂粒、黒・ 白色粒、角閃石 ④口辺部は 3/4、体部はほぼ完存。底部付 近を僅かに欠す。	外面 右→左にもしくは、下→上方の削りを行った後、 右方向削りで施す。(口辺は被削面)。 下→上方向の削りを行った後、口辺 は削りを行う。 ※全体的に滑らかにいため粘土組の難易度が現る。
16	土師器 甕	No.6	口径(25.4) 底径 7.8 高さ 26.9	①良好 ②褐色 ③石英、白色 粒、赤褐色粒 ④口辺部～脚部 上半/2欠損	外面 口縁部根掘で、肩部削り→下位削り→下端削り。 口縁部根掘で、脚部削り→下斜削り。 内面 下から上もしくは右下→左上方向の反時計回り。
17	土師器 甕	No.6	口径 16.5 底径 8.7 高さ 17.5	①普通 ②淡褐色～青褐色 ③砂粒、白色粒、黒色粒、チャー ト片 ④口辺部のみは完存	外面 中位より下部は下→上方向の削り。その後、上部は 威力により平行根掘を伴う工具で印加目を施す。(向きは 常に反対面回り) 口辺部に窓を押し当たした痕が現る。 内面 下から上もしくは右下→左上方向の反時計回り。
番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成 ②石軽 ③残存	成・整形技法の特徴
18	石製陶冶 品	No.13	長さ 5.10 幅 2.35 厚さ 0.75 重量 12.96	①普通 ②滑石 ③端部欠損	中央2箇所に穿孔あり。断面形状は瓦方型を呈する。
19	砾石	1区1層	長さ 7.45 幅 4.17 厚さ 3.10 重量 119.86	① - ②滑状岩 ③元形	端部欠損後も使用。底面には擦痕が認められる。
番号	器種	出土位置	法量(cm)	①焼成 ②色斑 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴
20	赤生土器 小形甕又 は壺	3区2層	口径 - 底径 3.4 高さ <1.5>	①普通 ②赤色(10YR5/6赤影 部分、淡褐色(上部部分) ③砂粒、黑色粒 ④底部のみは完存し、それ以外はほぼ欠 損する。	外面 橫方向削り。 内面 放射状に窓をきく。
21	赤生土器 甕	2区3層	口径 - 底径 - 高さ <2.7>	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色粒 ④口縁部破片	外面 単純R L翼文を施す。角度を変えて部分的に二度施文 している。 内面 橫方向窓をきく。
22	赤生土器 甕	3区1層	口径 - 底径 - 高さ <4.0>	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、黑色粒 ④口縁部破片	外面 口縁部上面、短辺縁を連続して施す。それ以外は横方向 窓をきく。 内面 橫方向窓をきく。
23	赤生土器 甕	2区2層	口径 - 底径 - 高さ <4.8>	①普通 ②暗黄褐色 ③砂粒、 黑色粒、片岩 ④口辺部～瓶部 破片	外面 瓶部横文。(六連止)。 内面 橫方向窓をきく。
24	赤生土器 甕	2区2層	口径 - 底径 - 高さ <3.0>	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、黑色粒 ④瓶部上位破片	外面 瓶部沈線(先端状)施文後、櫛状工具による波状文。 内面 橫方向窓をきく。
25	赤生土器 甕	2区2層	口径 - 底径 - 高さ <2.4>	①普通 ②にぶい褐色 ③砂 粒、黑色粒 ④瓶部上位破片	外面 櫛状工具による複雑な波状文。波状モチーフが壊れて いる。 内面 橫方向窓をきく。
26	赤生土器 甕	2区3層	口径 - 底径 - 高さ <2.2>	①普通 ②にぶい褐色 ③砂 粒、黑色粒 ④瓶部上位破片	外面 櫛状工具による波状文施文後、瓶底～側位並行沈線を 施す。 内面 橫方向窓をきく。
27	赤生土器 甕	3区1層	口径 - 底径 - 高さ <3.9>	①良好 ②黄褐色 ③砂粒、白 色粒 ④瓶部上位破片	外面 連続瓶底上位に櫛状工具による横位平行沈線。沈線の 下位の一部窓をきく。 内面 橫方向～斜め方向窓をきく。
28	赤生土器 トレンチ	7区・8区 トレンチ	口径 - 底径 - 高さ <4.1>	①普通 ②にぶい褐色 ③砂 粒、白色粒、薺毎片 ④瓶部上位破 片	外面 櫛状工具による波状文。 内面 橫方向窓をきく。
29	赤生土器 甕	7区2層	口径 - 底径 - 高さ <4.6>	①良好 ②暗黄褐色 ③砂粒、 黑色粒 ④瓶部上位破片	外面 櫛状工具による横文施文後、同工具による波状文。 内面 橫度。一部に横模様が認められる。
30	赤生土器 甕	7区2層	口径 - 底径 - 高さ <2.9>	①普通 ②褐色 ③砂粒、黑色 粒 ④瓶部上位破片	外面 櫛状工具による横状文(二連止)と波状文。 内面 波状で。(不明瞭)。
31	赤生土器?	3区2層	口径 - 底径 - 高さ <3.5>	①良好 ②褐色 ③砂粒、黑 色粒 ④瓶部上位破片	斜位削り後、櫛状工具による斜位直線状・斜位弧状 平行沈線を施す。 内面 斜め。
32	赤生土器 甕	3区3層	口径 - 底径 - 高さ <5.5>	①普通 ②にぶい褐色 ③砂 粒、黑色粒 ④口辺部～瓶部破 片	外面 口辺部、櫛状工具による波状文。波状モチーフは 壊れている。瓶部、同工具による横位平行沈線(裏返りか)。 内面 斜め方向窓をきく。
33	赤生土器 甕	ベルト	口径 - 底径 - 高さ <6.5>	①普通 ②褐色 ③砂粒、白色 粒、黑色粒 ④口辺部～瓶部 上位破片	外面 口辺部削り、櫛状工具による波状文。 内面 瓶底のため不明瞭であるが、横方向窓をきくと思われる。
34	赤生土器 甕	3区3層	口径 - 底径 - 高さ <2.2>	①普通 ②褐色 ③砂粒、黑色 粒 ④瓶部破片	外面 櫛状工具による波状文と逆文を施す。逆光寺式の 影響かとされる土器と考えられる。 内面 刻落と磨滅のため不明瞭。

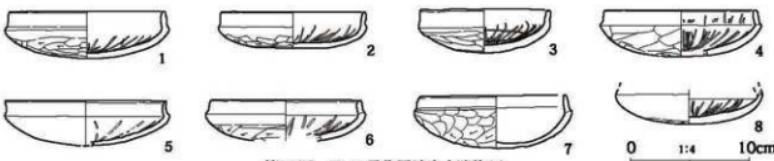
第13表 H-12号住居址出土遺物観察表(2)

⑥ H-13号住居址（第32～34図、第14・15表、PL. 9・10・15）

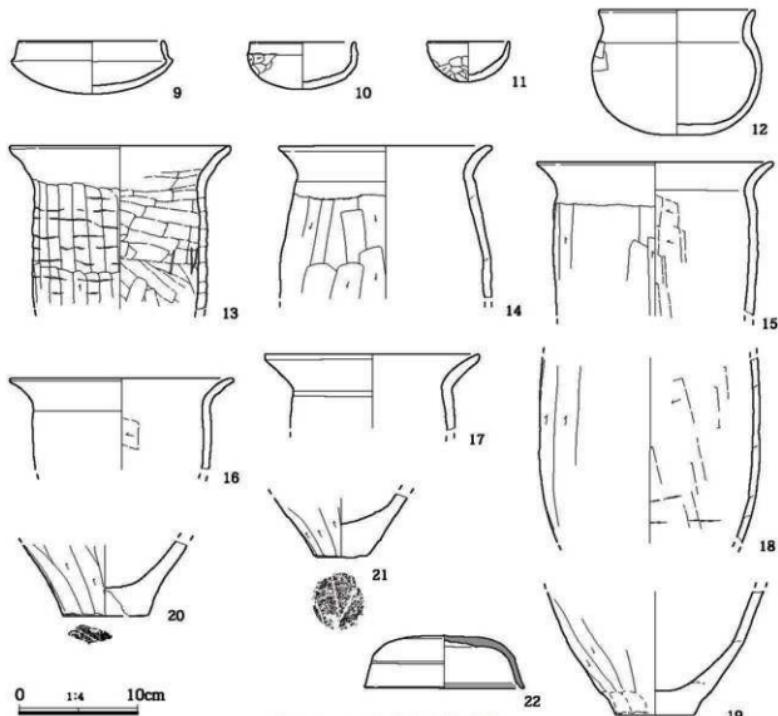
位置 M区、5D 44グリッド他に位置する。南東コーナー付近がD 17号土坑と重複する。形状・特徴 住居址の2/3程度を確認していると考えられる。方形基調住居址である。東西不明（確認部分3.5m）×南北4.5m×深さ0.3m。北壁にカマドが付設され、カマド右手で貯蔵穴が確認されている。主柱穴址と想定されるピットが3基検出されている。覆土 しまった暗褐色土を主体とする。ローム土を含む三角堆積が認められる。カマド 主柱穴位置から判断すると、北壁中央付近に付設されていると想定される。両袖部基部・燃焼部中央が擾乱で壊されているため、詳細は不明。遺物 士師器杯・壺・須恵器蓋等、多量の遺物が確認されている。時期 6世紀半ばと考えられる。



第32図 H-13号住居址



第33図 H-13号住居址出土遺物(1)



第34図 H-13号住居址出土遺物(2)

H-13号住居址

番号	器種	出土位置	法量(cm)	①純成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴
1	土師器 壺	No.3	口径 13.0 底径 4.0 高さ 4.0	①良好 ②にぶい黄褐色 ③チャート、黒色粒、赤色粒 ④完形	外面部 口縁部削り、体部上半箇で下平～底部削り。 内面部 口縁部削り、体部～底部削り→側磨き。
2	土師器 壺	No.4	口径 12.0 底径 3.1 高さ 3.1	①良好 ②黒色 ③黒色粒、白色粒 ④ほぼ完形	外面部 口縁部削り、体部上半箇で下平～底部削り。 内面部 口縁部削り、体部～底部削り→側磨き。
3	土師器 壺	No.1	口径 10.7 底径 3.7 高さ 3.7	①良好 ②にぶい黄褐色 ③黒色粒、白色粒 ④完形	外面部 口縁部削り、体部～底部削り。 内面部 口縁部削り、体部～底部削り→横・斜磨き。
4	土師器 壺	No.6	口径(12.6) 底径 一 高さ 3.9	①良好 ②にぶい黄褐色 ③チャート、黒色粒 ④口縁部～底部1/3	外面部 口縁部削り、体部削り。 内面部 口縁部削り、体部削り→斜磨き。
5	土師器 壺	No.7	口径(13.4) 底径 一 高さ <3.8	①良好 ②褐色 ③白色粒、赤色粒 ④1/2	外面部 口縁部削り、体部～底部表面荒れ削り。 内面部 口縁部削り、体部～底部削り→斜磨き表面荒れ削り。
6	土師器 壺	9区1層	口径(12.6) 底径 <3.4 高さ 体部1/5	①良好 ②にぶい褐色 ③チャート、黒色粒 ④口縁部～体部1/5	外面部 口縁部削り、体部上半箇で下平削り。 内面部 口縁部削り、体部削りで側磨き。

第14表 H-13号住居址出土遺物概察表(1)

H-13号住居址

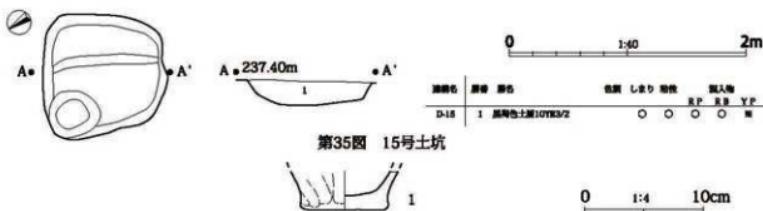
番号	器種	出土位置	法寸(㎝)	①焼成 ②色調 ③断面 ④残存	成形・焼成技術の特徴
7	土師器 环	No.2	口径 12.2 底径 - 器高 4.5	①良好 ②灰褐色 ③砂粒、白色・黒色粒、チャート片 ④完存	外周 体部～底部削り。(反時計回り) 縦より上部(口辺部) は横削で。 内面 体部～底部削り。(反時計回り) 全体部と口辺部との縫に明顯な段が付くが、これは粘土紙の繊ぎ 目を擦で消した跡と考えられる。
8	土師器 环	7区2層	口径 - 底径 - 器高 <2.9	①良好 ②灰褐色 ③砂粒 白色・黒色粒 ④体部～底部1/3	外周 体部上半部で、下部～底は横削り。 内面 体部～底部削り～倒伏。
9	土師器 环	10区1層 10区2層	口径 12.5 底径 - 器高 4.3	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色・黒色粒、角閃石 ④口辺部/3、体部1/2	外周 体部下半は横方向削り後回転削で。肩上半は回転削で。 内面 横方向削りか? 回転削。
10	土師器 环	10区2層	口径 (9.0) 底径 (4.0) 器高 (4.0)	①不良 ②灰褐色 ③砂粒、白色・ 黒色粒、チャート片、角閃石 ④体部1/3程度、口辺は1/8程度 底部は全体に残る。	外周 横方向削り後、口辺部は横削で。 内面 橫方向削り。 ※内外部共に磨滅が激しく、變形は判然としない。
11	土師器 环	11区ベルト	口径 (8.5) 底径 - 器高 3.4	①普通 ②灰褐色 ③砂粒、白 色・黒色粒 ④口辺～体部まで 全体的に1/2程度	外周 下半は不規則な削り。(反時計回り) 上半は削り後 削離で。
12	土師器 小型壺	竈	口径 (13.0) 底径 (1.0) 器高 (10.6)	①普通 ②にぶい褐色 ③砂 粒、角閃石/口辺/全体も同 様だが、下半は全て欠損する。	外周 横方向削り後、口辺削離で。 内面 横方向削離。
13	土師器 壺	1区2層 6区1層 10区1層 11区ベルト	口径 (18.3) 底径 (6.0) 器高 <13.7	①良好 ②灰褐色 ③石英、白色 粒、黒色粒、小礫(3~5mm) ④口辺部～脚部上半1/4	外周 口縁部横削で、底部縱削り。 内面 口縁部横削で、脚部中位横削離。 外面部に輪郭み痕明顯。
14	土師器 壺	1区2層 5区1層 2区ベルト 土塗	口径 (17.6) 底径 (6.0) 器高 <12.9-20.0	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色・黒色粒 ④口辺1/3 程度、体部も同じ。体部下半 は全て欠損する。	外周 削り(上→下)後、颈部より上は横削で。 内面 斜め方向削離で後、颈部より上は横削で。
15	土師器 壺	5区1層 竈	口径 (20.0) 底径 - 器高 <13.0-20.0	①良好 ②淡褐色 ③砂粒、白 色・黒色粒、チャート片 ③口 辺、体部は1/4程度。下半は 全て欠損する。	外周 下→上方向の削り後、口辺横削離。 内面 削離で(斜め方向)後、口辺横削離。
16	土師器 壺	6区1層 10区2層	口径 (18.6) 底径 - 器高 <7.7	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色・黒色粒、チャート片 ④口辺、体部1/3程度	外周 橫方向削り後、縱方向削で。口辺は横削で。 内面 橫方向削離び縦方向削離で。口辺は横削で。
17	土師器 壺	6区1層	口径 (18.0) 底径 - 器高 <6.2	①普通 ②にぶい黄褐色の塊。 白色・黒色粒、チャート片 ④口辺一部上半のみ1/5程度 残る。それ以外は欠損する。	外周 縦方向削り。(下→上) 頸部より上は削り後、縦削離で。 内面 橫方向削離。
18	土師器 壺	7区2層 3区ベルト 4区ベルト	口径 - 底径 - 器高 <15.7	①良好 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色・黒色粒、チャート片 、角閃石 ④脚部1/3程度 残る。他は欠損。	外周 削り。(下→上) 内面 橫方向削離で、上半は削離で後、縦削離で。(下→上)
19	土師器 壺	5区1層	口径 - 底径 - 器高 <10.5	①普通 ②にぶい黄褐色 ③砂 粒、白色・黒色粒、チャート片 、角閃石 ④脚部1/3程度 残る。他は欠損。	外周 削り(下→上)後、底部近く指押さえ。 内面 削り(下→上)後、縦削離。
20	土師器 壺	6区1層 3区ベルト	口径 - 底径 (7.0) 器高 <6.0	①普通 ②淡褐色～にぶい黄 褐色 ③砂粒、白色・黒色粒 ④ 脚部下半1/4残存し、底部は僅 かに残る。中位以外は全て欠損 する。	外周 削り。(下→上) 内面 削離で。 外面部に木製圧痕残る。
21	土師器 壺	3区ベルト	口径 - 底径 4.2 器高 <5.0	①普通 ②淡褐色～にぶい黄 褐色 ③砂粒、白色・黒色粒 ④ 脚部のみ残存。体部は下半の1/3位 かに残り中位より上は欠損する。	外周 削り。(下→上、反時計回り) 内面 削離で。(反時計回り) 外面部に木製圧痕残る。
22	須彌壺 壺蓋	No.5	口径 13.4 底径 - 器高 4.4	①良好 (深元) ②灰黄色 ③ 砂粒、白色・黒色粒 ④全体の 2/5	外周 回転クロロ離で。天井部は回転削り。頂部は厚平。 内面 回転クロロ離で。

第15表 H-13号住居址出土遺物概要表(2)

(2) 土坑・ピット

① 15号土坑 (第35・36図、第16表、PL. 6・7・15)

位置 K1区、4C 48グリッドに位置する。形状・特徴 平面は楕円方形、断面は皿状を呈する。北端部分に一段低い部分を有する。長軸 1.2m × 短軸 1.1m × 深さ 0.2m 覆土 しまった黒褐色土。遺物 土師器壺等が出土している。時期 5世紀後半～6世紀と考えられる。



第35図 15号土坑

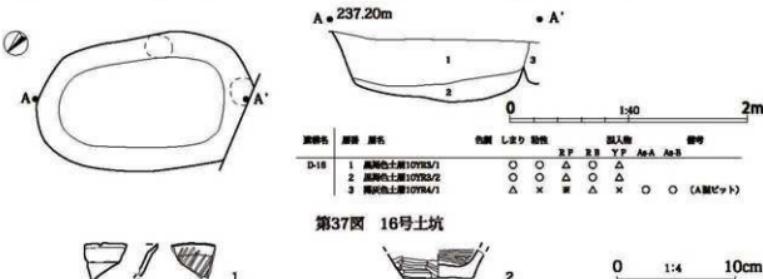
第36図 15号土坑出土遺物

番号	層 種	出土位置	法面(cm)	成・整形技法の特徴			
				焼成	色調	土質	残存
1	土師器 壺	覆土	口径 一 底径 (7.2) 高さ <3.4>	①普通 ②にいわゆる 砂粒・白色粒 ④底部下位～底部 破片	②褐色 ③砂粒	④粘土	外側 壁面～斜め方向直面。 内面 荒廃き？

第16表 15号土坑出土遺物観察表

② 16号土坑 (第37・38図、第17表、PL. 6・7・15)

位置 K1区、4C 69グリッド他に位置する。形状・特徴 南西の一部が調査区外となるが、平面は楕円形と想定される。断面は碗状。As-A'混土を覆土とするピットに、一部が壺されている。長軸不明 (確認部分 1.8m) × 短軸 1.1m × 深さ 0.6m 覆土 しまった黒褐色土を主体とする。遺物 土師器壺等が出土している。また、赤生土器が混入している。時期 5世紀後半～6世紀前半と考えられる。



第37図 16号土坑

第38図 16号土坑出土遺物

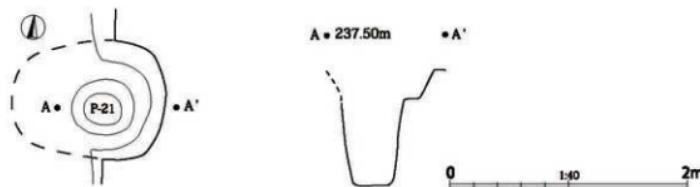
番号	層 種	出土位置	法面(cm)	成・整形技法の特徴			
				焼成	色調	土質	残存
1	土師器 壺	覆土	口径 一 底径 5.9 高さ <2.4>	①良好 ②褐色 ③砂粒・黑色 ④口縁部～体部上位破片	②褐色 ③砂粒	④粘土	外側 口縁部直面で、体部直面。 内面 放射状直面。
2	赤生土器 壺	覆土	口径 一 底径 5.9 高さ <2.4>	①良好 ②にいわゆる 砂粒・白色・黒色粒 ⑤底部下位 ～底部破片	②褐色 ③砂粒	④粘土	外側 横方向直面。 内面 横方向直面。

第17表 16号土坑出土遺物観察表

③ 21号ピット（第39・40図、第18表、PL. 6・7・15）

位置 K 1 区、4 C 69 グリッド他に位置する。H 10 号住居址と重複する。本遺構の方が新しい。形状・特徴 H 10 号住居址と重複しているため平面形状は不明だが、円形又は梢円形と考えられる。途中にステップ状の平坦部を有する。長軸不明（推定 1.3m）×短軸 1.0m ×深さ 1.0m 覆土 不明 遺物

土師器坏が出土している。時期 出土遺物から判断すると、H 10 号住居址との時期差は認められず、5世紀後半と考えられる。独立したピットではなく、H 10 号住居址に伴う遺構である可能性もある。



第39図 21号ピット



第40図 21号ピット出土遺物

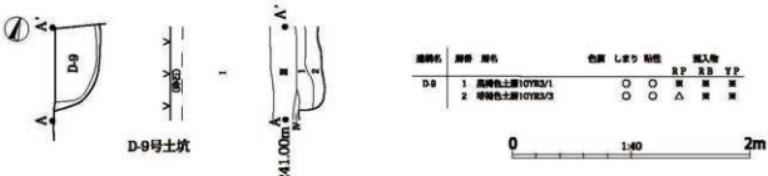
番号	器種	出土位置	法面(m)	成・造形技術の特徴			
				①焼成	②色調	③胎土	④焼存
1	土師器 坏	覆土	口深(13.2) 底存 器高<4.1> 1/4、体部1/6遺存	①普通 ②褐色 ③胎土 ④白色粉、黒色粒 ⑤白色粉、黒色粒 ⑥口縁部 ⑦内面 ⑧放射線状剥離	外縁 口縁部削除し、体部面削り。		

第18表 21号ピット出土遺物観察表

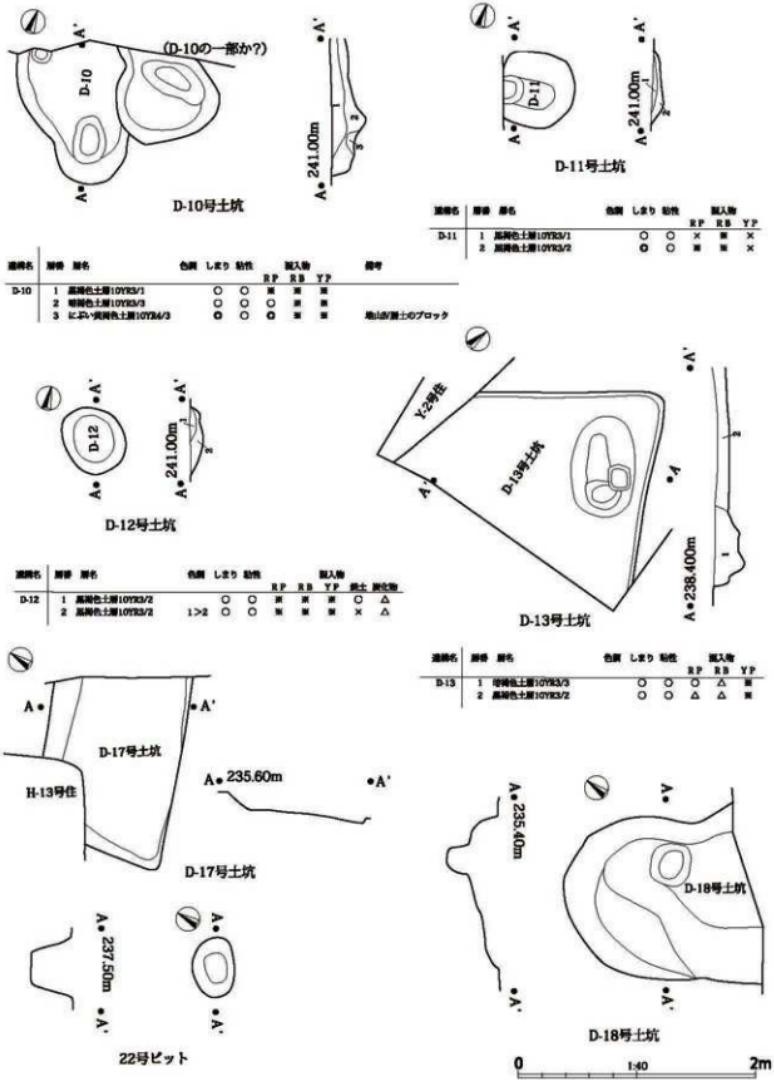
第4節 時期不明遺構



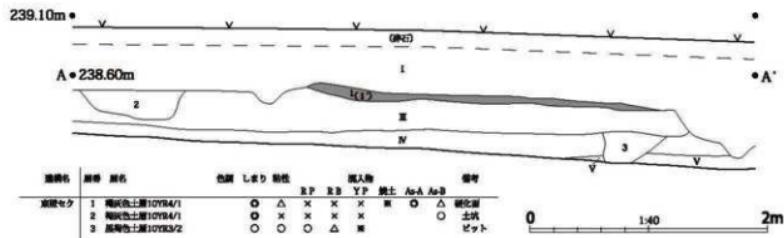
6号溝



第41図 6号溝、9号土坑



第42図 10~13号・17・18号土坑、22号ビット



第43図 I区東壁セクション(As-A混土硬化面)



第44図 11号土坑出土遺物

11号土坑							成・整形技法の特徴	
番号	層番	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 ①普通 ②にいき色 ③砂 透、植物繊維 ④網状破片	透、植物繊維			成・整形技法の特徴
1	陶文土場 深井	11号土坑 口縁	一 底径 器高 <4.7>	①普通 ②にいき色 ③砂 透、植物繊維 ④網状破片	透、植物繊維	透、植物繊維	透、植物繊維	透、植物繊維

第19表 11号土坑出土遺物観察表



第45図 18号土坑出土遺物

18号土坑							成・整形技法の特徴	
番号	層番	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存 ①普通 (透光) ②灰黄褐色 透、角閃石 ④口縁部破片	透、植物繊維			成・整形技法の特徴
1	須恵器 底又は羽 釜	土	口縁 底径 器高 <4.9>	透、植物繊維	透、植物繊維	透、植物繊維	透、植物繊維	透、植物繊維

第20表 18号土坑出土遺物観察表

測定名	位置		規模		深さ	断面形状	備考	
	区	グリッド	長軸	最大幅				
6号溝	F	2 B 12	(2.58)	(0.47)	0.16	筒状		

(単位はm)

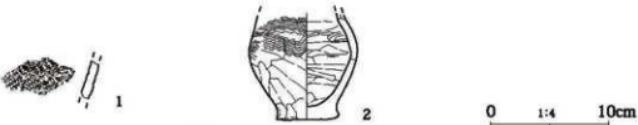
第21表 溝観察表

測定名	位置		規模(上)		規模(下)		深さ	平面形状	断面形状	備考
	区	グリッド	長軸	短軸	長軸	短軸				
9号土坑	F	2 B 11	(0.7)	(0.38)	(0.6)	(0.34)	0.24	不明	不明	1/4程度検出か。
10号土坑	F	2 B 12他	(1.22)	不明	(1.05)	不明	0.31	不明	不明	
11号土坑	F	2 B 22	(0.7)	(0.65)	(0.46)	(0.22)	0.11	円形?	皿状	
12号土坑	F	2 B 22	0.58	0.49	0.41	0.31	0.12	楕円形	皿状	
13号土坑	H	3 C 74	(2.32)	(1.94)	(2.26)	(1.89)	0.13	不明	不明	Y-2号住と重複する。
17号土坑	M	5 D 45	(1.68)	(1.14)	(1.55)	(0.94)	0.15	不明	不明	II-13号住と重複する。
18号土坑	M	5 D 55	(1.69)	(1.49)	(1.42)	(0.81)	0.45	不明	不整形	
22号*†	K 1	4 C 49	0.5	0.24	0.36	0.18	0.35	楕円形	皿状	

(単位はm)

第22表 土坑・ピット観察表

第5節 遺構外出土遺物



第46図 F区出土遺物

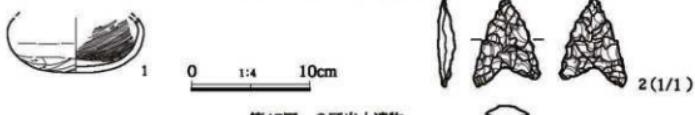
F区			
番号	器種	出土位置	法量(cm)
1	縞文土器 深杯	IV層中 口径 底径 器高	— — — <3.4>
2	赤生土器 小型盤	Ⅳ層中 口径 底径 器高	— 5.1 <9.0> — — —

成・整形技法の特徴

縞文土器 深杯の深縫の断面片である。R LとLRの羽状縞文施文。

赤生土器 小型盤 外面 断面波状文2段。腹部縫・斜縫で、直縫で。
内面 断面横・斜縫で→上位割れ模様。底部縫で。

第23表 F区出土遺物観察表



第47図 G区出土遺物

G区			
番号	器種	出土位置	法量(cm)
1	土器器 环	一括 口径 底径 器高	— — — <4.6> 1/4
2	打撲石器	IV層中 長さ 幅 厚さ 重量	1.87 1.40 0.38 0.44

成・整形技法の特徴

土器器 环 ①焼成 ②色調 ③土色 ④残存
①良好 ②赤褐色 ③石灰、黒、外側 体連上平縫で、下半→底部削り。
色藍色、白色粒 ④体連 内面 体連→底部縫で→側縫。

成・整形技法の特徴

打撲石器 ①凹基底縫 ②黒曜石 光形

第24表 C区出土遺物観察表



第48図 H区出土遺物

H区			
番号	器種	出土位置	法量(cm)
1	赤生土器 盤	調査区一括 口径 底径 器高	— — — <5.1>
2	赤生土器 盤	調査区一括 口径 底径 器高	— — — <4.2>

成・整形技法の特徴

赤生土器 盤 ①焼成 ②色調 ③土色 ④残存
①普通 ②褐色 ③砂粒・白色
粒、片岩 ④口部破片 外面 口縫縦、断面平行縫の折り返し。断面状工具による波状文施文。口辺部範囲方向削毛目。
内面 施文のため不明顯。横方向削磨き。

赤生土器 盘 ①好 ②褐色 ③砂粒
④口部上位破片 外面 断面状工具による横位平行波状文。波状部以外は横方向
内面 横方向削磨き。

第25表 H区出土遺物観察表



第49図 J区出土遺物

J区								
番号	器種	出土位置	法面(cm)	①焼成 ②色刷 ③陶土 ④残存	成・整形技法の特徴			
1	弥生土器 甕	I 層中	口径一 底径一 高さ <3.1>	①普通 ②褐色 ③砂粒・黑色 ④頸部破片	外面 錫畫状工具による複雑な波状。波状モチーフが流れている。 内面 横方向旋磨。			
2	弥生土器 甕	I 层中	口径一 底径一 高さ <4.8>	①良好 ②褐色 ③砂粒・黑色 ④頸部上位破片	進存部上半、錫畫状工具による複雑な波状文。 波状モチーフが流れている。下半旋磨で? 内面 横・斜方向旋磨。			
3	弥生土器 甕	試掘堆土内	口径二 底径一 高さ <4.5>	①良好 ②褐色 ③砂粒 ④頸部上位破片	進存部上半、錫畫状工具による波状文。 下半、斜め方向旋磨。 内面 橫・斜方向旋磨。			

第26表 J区出土遺物観察表

第5章 成果と課題

今回の調査において検出された主な遺構は、弥生時代住居址4棟・土坑1基、古墳時代住居址6棟・土坑2基・ピット1基等である。ここでは、第1次調査の成果も加味しながら、本遺跡周辺地域における弥生時代・古墳時代集落の範囲・変遷等についてまとめてみたい。また、H-12号住居に付設された特異な形状のカマドについても、類似例と比較しながら検討を試みる。

弥生時代・古墳時代集落の変遷について

第1次調査・2次調査で確認された住居址総数は、弥生時代5棟・古墳時代13棟、合計18棟である。これらの住居址を、構築された時期ごとに区分すると概ね5期に分けることができる。即ち、次の5期である。

I期 弥生時代中期後半栗林式期

II期 弥生時代後期樽式期

III期 古墳時代中期（5世紀前半を主体とする）

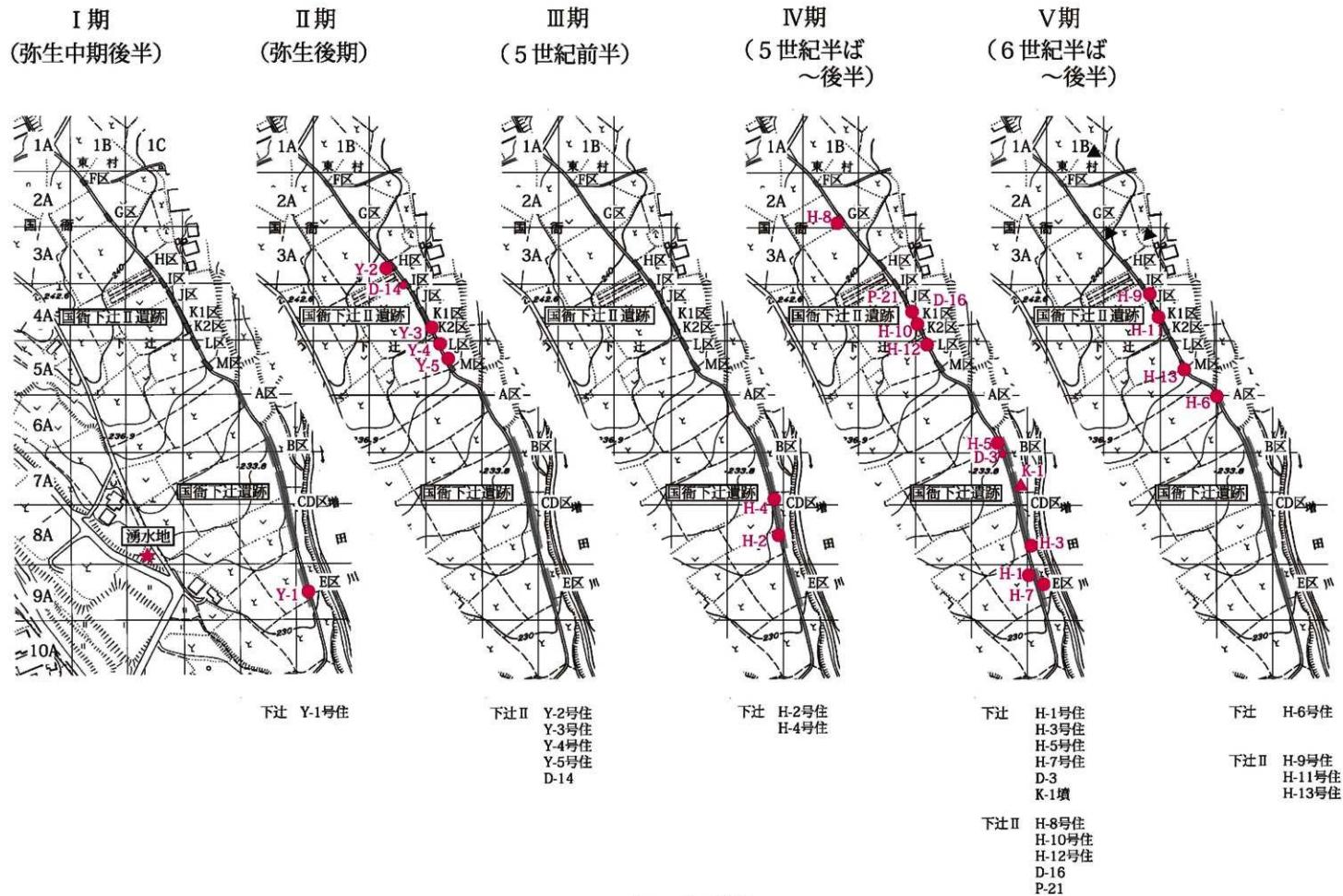
IV期 古墳時代中期（5世紀半ば～5世紀後半を主体とする）

V期 古墳時代後期（6世紀半ば～後半を主体とする）

第27表に検出住居址を時期別に示す。

時期	遺跡名	遺跡名	カマド・炉	時期	時期区分の基準
I期	下辻	Y-1号住居	不明	弥生時代中期後半	栗林式期。
II期	下辻II	Y-2号住居	不明(調査区外)	弥生時代後期	樽式期。
	下辻II	Y-3号住居	北寄り(伊豆あり)	弥生時代後期	
	下辻II	Y-4号住居	不明(調査区外)	弥生時代後期	
	下辻II	Y-5号住居	不明(調査区外)	弥生時代後期	
III期	下辻	H-2号住居	不明(炉と想定される)	5世紀前半	伊豆が付設されている。器種組成に台付甕が残る。
	下辻	H-4号住居	不明(炉と想定される)	5世紀半ば	
IV期	下辻II	H-12号住居	東カマド	5世紀半ば	カマドが付設されている。器種組成から台付甕が消え、所謂「内斜口縁坏」が定型化する。
	下辻	H-7号住居	北カマド	5世紀後半	
	下辻	H-1号住居	東カマド	5世紀後半	
	下辻II	H-8号住居	東カマド	5世紀後半	
	下辻	H-3号住居	不明(カマドと想定される)	5世紀後半	
	下辻II	H-10号住居	不明(カマドと想定される)	5世紀後半	
V期	下辻	H-5号住居	東カマド	6世紀前半	縦の長脚化が認められる。所謂「横脚坏」を伴う。
	下辻II	H-6号住居	北カマド	6世紀後半	
	下辻II	H-11号住居	東カマド	6世紀半ば	
	下辻II	H-9号住居	北カマド	6世紀半ば	
	下辻II	H-13号住居	北カマド	6世紀半ば	

第27表 時期別住居址一覧



第30図 時期別遺構位置図

ここでは、主に九十九川流域に所在する遺跡の調査成果も踏まえながら、各期における集落の規模・範囲等についてまとめる。

(Ⅰ期)

本遺跡では当該期遺構は検出されなかったが、下辻遺跡Y-1号住居址が該当する。県下全体の傾向と認識しているが、栗林式期の集落は比較的小規模なものが疎らに営まれる状況が一般的である。本遺跡が位置する九十九川流域においても、当該期住居址は小日向遠地谷戸遺跡A区1号・B区9号住居址、国衙下辻遺跡Y-1号住居址、国衙遺跡群II 15号住居址の4棟のみである。これらの4棟の住居址は、いずれも栗林II式期の所産である。今回の調査において当該期遺物の出土が確認されなかつたことから、下辻遺跡Y-1号住居址周辺に極小規模な集落が営まれていた状況が想定される。

(Ⅱ期)

本遺跡Y-2号～5号住居址が該当する。本市を含む群馬県西部地域においては、弥生時代後期になると検出される住居址数が急増する。これは、栗林式期に始まったとされる北信地域からの人の流れ(集団移動的移動)が一気に加速したことや意味するものと考えられる。九十九川流域においては、古里地区遺跡群76棟、小日向地区遺跡群180棟、本遺跡4棟、国衙遺跡群2棟、合計262棟もの様式住居址が確認されており、県下でも有数の大規模集落ということができよう。本遺跡においても、農道幅の狭小な調査区域の中に4棟の住居址が確認されているので、周辺に一定規模の集落が営まれていたことは確実と考えられる。

(Ⅲ期)

5世紀前半を主体とする。本遺跡においては当該期住居址は確認されなかつたが、下辻遺跡H-2号・4号住居址が本期の所産である。本期の住居址は燃焼施設として炉を有するのが一般的である。土器の器種構成には、刷毛目が消え、箋削り調整の台付壺を伴う。市内全体の傾向として当該期遺構は少なく、本遺跡周辺においても例外ではない。

(Ⅳ期)

5世紀半ば～後半を主体とし、燃焼施設としてカマドが出現・普及する時期である。器種組成から台付壺が消え、所謂「内斜口縁壺」が定型化する。下辻遺跡1号・3号・5号・7号住居址、下辻II遺跡8号・10号・12号住居址が本期の所産である。本期から造構数は急増する傾向が認められ、住居址以外に土坑・ピットも確認されており、下辻・下辻II両遺跡に満遍なく造構が展開している。本遺跡周辺において最も大規模な集落が営まれた時期と想定される。

(Ⅴ期)

6世紀半ばを主体とする。器種組成に所謂「模倣壺」を伴い、壺の長胴化が始まる時期である。下辻遺跡6号住居址、下辻II遺跡9号・11号・13号住居址が本期の所産である。IV期においては、下辻・下辻II両遺跡全体に集落が営まれていたが、本期においては両遺跡の境界付近に造構が集中する傾向が看取できる。IV期と比較すれば集落規模は縮小している可能性が高いが、一定規模は維持していたことが想定される。

以上、推測を交えながら各期の集落規模・範囲等について述べた。各期に共通する事象と考えられるが、下辻・下辻II両遺跡の調査区域は台地北東寄り(増田川寄り)に位置している。このため、集落の中心部は平坦部が広がる調査区南西側(九十九川寄り)に位置するものと想定される。周辺の遺物散布状況もこれを裏付けている。このような状況の中、現在でも湧水が認められる台地南北斜面の地点(第50図の「I期」図中に表示)が、集落形成位置を決定する一要因となっていることが考えられる。

H-12号住居址カマドについて

本住居址は、出土遺物より5世紀後半(第3四半期)の所産と想定され、カマドが付設された住居址としては最古級のものと考えられる。カマドは、一般的に見られるローム土による構築ではなく、人頭大の礫を直線状に並べて袖部を構築するという特異な形状を呈している。礫の周囲をローム土で被覆した様子は看取できず、礫を並べただけのカマドという感が強い。類似例は、隣接する小日向地区的田中西遺跡(平成19年度調査)H-27号住居址(第52図参照)において確認されている。市内において、このような形状のカマドが検出されたのは田中西遺跡が初めてと思われる。その後、加賀原遺跡2(平

成20年度第4次調査) H-99号住居址(第53図参照)においても類似するカマドが確認された。出土遺物は、いずれの住居址も5世紀後半の所産であることを示唆している。これらの3基のカマドを観察表により比較してみる。

遺跡名	住居名	住居規模(単位cm)	カマド付設位置	カマド法量(内面、単位cm)					袖部石の数 右 左	貯蔵穴	備考
				長さ	幅	高さ	右	左			
下辻II	H-12号	南北不明×東西(880)	東壁やや南寄り	120	35	55	4	3	不明(カマド両脇では確認されていない)		左袖部の手前2石は原位置ではない可能性が高い。石の最下部が焼けている(浮いた状態)。原位置は保っていないが焚き口の腰架石が遺存する。焚き口・燃焼部に灰層は認められない。煙道は壁外へ延びない。
田中西	H-27号	南北410×東西400	北壁中央	105	30	40	4	3	南東コーナー付近		燃焼部ほぼ中央に支脚石が立った状態で遺存する。原位置は保っていないが焚き口の腰架石も遺存する。燃焼部内部の焼土は微量である。煙道は壁外へ僅かに延びる。
加賀塚2	H-99号	南北560×東西620	北壁やや東寄り	160	30	(40)	4	4	南東コーナー付近		天井部に構を横架している。原位置は保っていないが焚き口の腰架石も遺存する。火床がない、焼土も認められない。煙道は壁外へ僅かに延びる。

()の数値は推定。カマド法量の高さは、袖部石の上面までの数値。

第28表 カマド観察表

3基のカマドの共通点をまとめると、以下のとおりである。

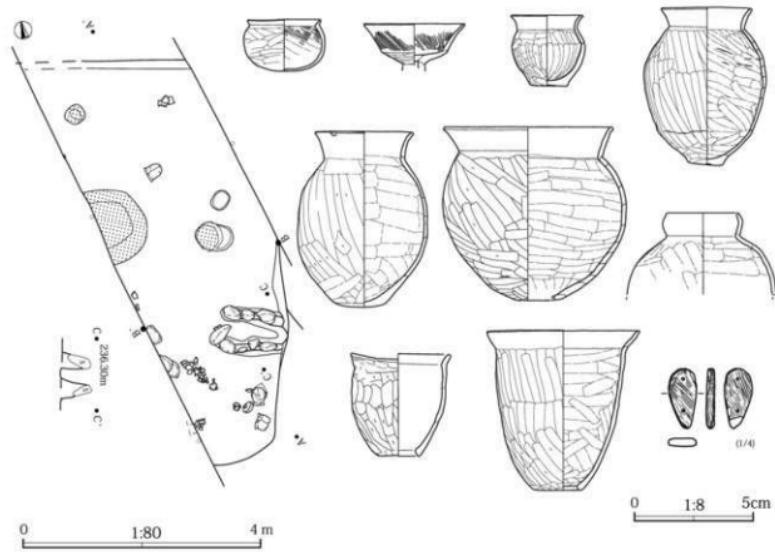
- やや扁平な径30~40cm程度の礫を、3~4個並べて燃焼部を構築している。
- 燃焼部の平面形状は長方形を基本とする(中央が膨らまない)。
- 燃焼部底面は比較的平坦である。特に下辻II H-12号・田中西H-27号住が顕著である。
- 原位置を保ってはいないが、焚き口に横架されたと想定される石が遺存する。
- 煙道は壁外へ延びない。又は延びても僅かである。
- カマドの軸が、住居主軸と比較して右方に傾いている。特に加賀塚2 H-99号住が顕著である。
- 燃焼部において、焼土・炭化物・灰層が確認できない。又は確認できても微量である。
- 貯蔵穴はカマド脇には構築されない。

一方、以下のような相違点も認められる。

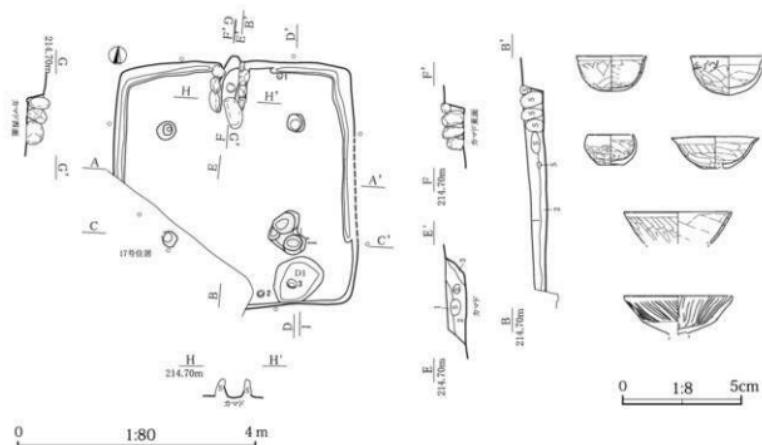
- 加賀塚2 H-99号住カマドのみ、礫を横架させ燃焼部を覆う。
- カマド付設位置は、壁の中央の場合と、やや右による場合が認められる。
- 田中西H-27号住カマドのみ支脚石が認められる。

周知のとおり、5世紀は所謂「後の五王」の時代であり、大陸から登り窯・本格的な製鉄技術の普及・馬の飼育や利用等様々な新しい技術や文化等を盛んに取り入れた時期である。カマドもこの流れの中で輸入された文化の一つであり、本県周辺においては5世紀後半に初現し、瞬く間に一般的な燃焼施設として炉に代わり広く普及していった。前述のように、出土遺物より3基のカマドは出現期のカマドと位置づけることができる。本遺跡H-12号住については貯蔵穴は検出されていないが、田中西H-27号住及び加賀塚2 H-99号住は、いずれも北壁に付設されたカマド脇ではなく、南東コーナー付近において貯蔵穴が確認されている。この貯蔵穴の位置は、前代の影響を残すものと考えられ、両住居址がカマド出現期の所産であることを裏付けるものである。

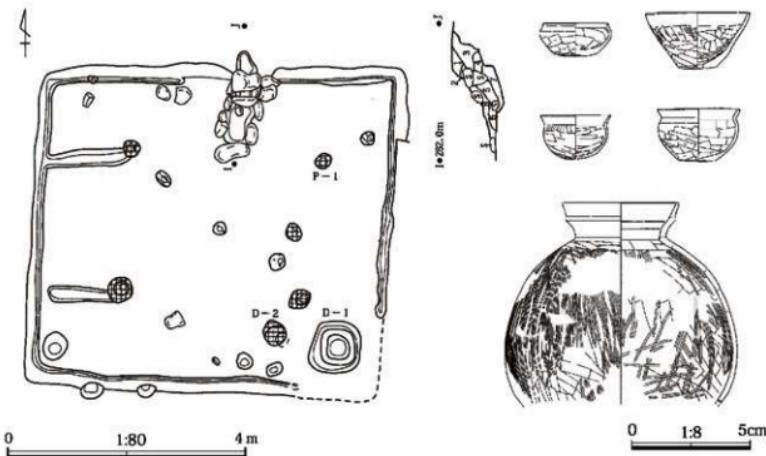
検出状況の中で看過できないのが、いずれのカマドの燃焼部からも焼土・炭化物・灰層が検出されない、又は検出されても微量であるという点である。つまり、これらのカマドは日常的には使用されていなかった可能性が考えられるのである。H-12号住からは坏・高坏・壠・壠等、比較的多量の遺物が出



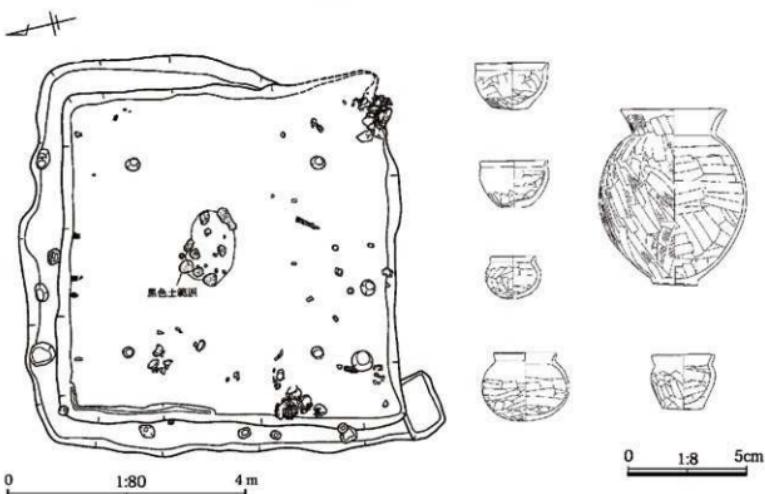
第51図 下辻II遺跡 H-12号住居址



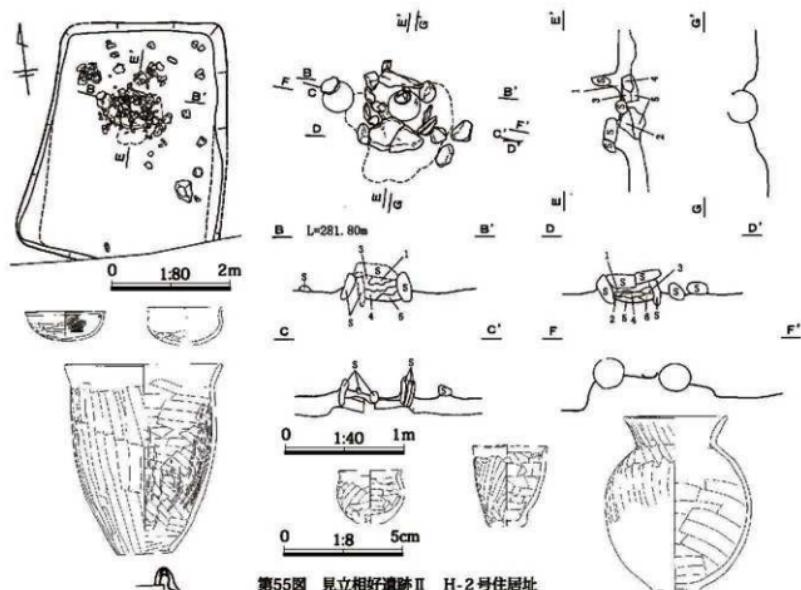
第52図 田中西遺跡 H-27号住居址



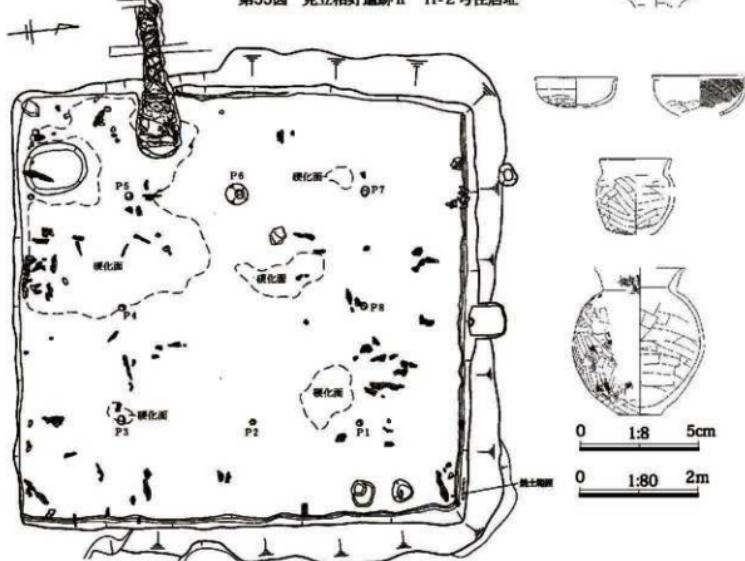
第53図 加賀塚遺跡2 H-99号住居址



第54図 見立相好遺跡II H-1号住居址



第55図 見立相好遺跡II H-2号住居址



第56図 見立相好遺跡II H-3号住居址

土している。石製模造品が1点出土していること、口縁部が「く」の字状に内屈する壺が出土していること以外、特段住居の特殊性は感じられない。田中西H-27号住及び加賀塚2H-99号住についても同様である。このように、出土遺物に特殊性は認められないが、カマドが恒常に使用されない住居であると仮定すれば、カマドの他に炉が併設されている、又は竪穴住居外に設置された炉やカマドを使用している可能性を考えなければならない。しかし、前述の3号住址の調査においては、住居内における炉、住居址周辺における屋外炉・屋外カマド的施設は確認されてはいない。

カマドと炉の併設については、旧勢多郡赤城村（現浪川市）見立相好遺跡II H-1号住址（第54図参照）の例があげられる（報告書では、同遺跡H-2号住址（第55図参照）で検出されたような焚き口を有する石囲い炉の施設が想定され、炉とは明らかに構造が異なるため「竈」として報告しているが、ここでは壁面に付設された一般的なカマドと区別するため「炉」と呼称しておく）。住居廃棄時に埋められていると考えられ遺存状況は不良であるが、南壁東寄りにカマド、中央やや北寄りに炉が検出されている。出土遺物から5世紀第3四半期（報告書では5世紀後半としている）の所産と想定され、前述した本市の3号住址とほぼ同時期のものと考えられる。また、前述のように同遺跡の2号住址においては、南北に礎を鳥居状に構築する石囲い炉の燃焼施設が検出されている。さらに、3号住址（第56図参照）においては、燃焼部・煙道部を角礎により構築する全長3m超のカマドが検出されている。各住居址で確認された燃焼施設の位置・形状等はそれぞれ大きく異なるが、いずれもほぼ同時期の所産と想定している。

以上のように、市内及び県内におけるカマド出現期の住居内燃焼施設については、高い特殊性を帯びた例が散見される。本遺跡H-12号住址検出のものも含め、これらの特異な形状・形態をしているカマドは、炉からカマドへという大きな社会的変化の流れの中、新たな燃焼施設が定型化・普遍化する過程において出現した一例と捉えることができよう。今後の近隣地域の同時期における住居内燃焼施設検出例の蓄積を持ち、特殊性の中に見いだせる普遍性や、定型化への移行の規則性・必然性について検討を重ねていきたい。

※ 「カまど」の表記は、本書中ではカタカナ表記に統一した。しかし、文中において他の報告書等から引用する場合は、その表記に従った。

〈主要参考文献〉

- 松井田町誌編さん委員会 1985 『松井田町誌』 松井田町誌編さん委員会
水沢 祝彦 田口 修 1992 『国衙遺跡群Ⅱ』 松井田町教育委員会
千田 茂雄他 2004 『古屋地区遺跡群』 安中市教育委員会
小林 修也 2005 『見立相好遺跡I・II』 赤城村教育委員会
井上 慎也他 2007 『加賀塚遺跡1』 安中市教育委員会
壁 伸明 常深 尚 2008 『高梨子地区遺跡群』 安中市教育委員会
千田 茂雄他 2009 『高橋IV遺跡（古屋地区遺跡群）』 安中市教育委員会
壁 伸明 2010 『国衙下社遺跡』 安中市教育委員会
壁 伸明他 2010 『小日向地区遺跡群』 安中市教育委員会
井上 慎也 石丸 敏史他 2011 『加賀塚遺跡2』 安中市教育委員会

写 真 図 版

P L. 1



(F区)

F区全景(北西より)



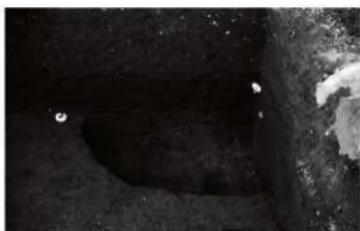
6号溝 セクション(東より)



6号溝 完掘状況(東より)



9号土坑 セクション(東より)



9号土坑 完掘状況(東より)



10号土坑 セクション(南より)



10号土坑 完掘状況(東より)



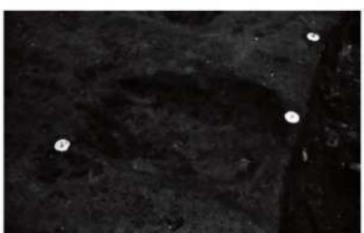
11号土坑 セクション(東より)



11号土坑 完掘状況(東より)



12号土坑 セクション(東より)



12号土坑 完掘状況(東より)



(G区) H-8号住 セクション(北より)



H-8号住 遺物出土状況(南より)

P L. 3



G 区 全景(北西より)



H-8号住 遺物出土状況(西より)



(H区) Y-2号住 セクション(北西より)



Y-2号住 遺物出土状況(南東より)



Y-2号住 完掘状況(北西より)



13号土坑 セクション(西より)



13号土坑 完掘状況(北東より)

PL.5



H区 全景(南東より)



(I区) I区全景(北西より)



14号土坑 完掘状況(北東より)



(J区) H-9号住 セクション(北東より)



H-9号住 カマド完掘状況(南より)



H-9号住 完掘状況(南より)



(K-1区) K-1区 全景(北西より)



H-10・11号住、21号ピット セクション(北西より)



H-10号住 遺物出土状況(北西より)



H-11号住 遺物出土状況(東より)

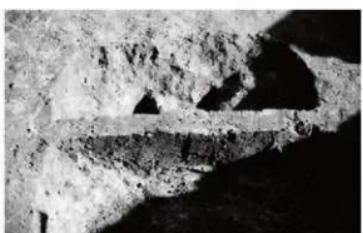
P L. 7



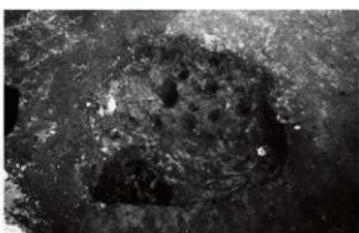
H-10・11号住、21号ピット 完掘状況(東より)



H-10・11号住、21号ピット 完掘状況(北西より)



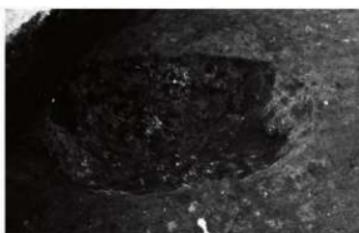
15号土坑 セクション(北西より)



15号土坑 完掘状況(北西より)



16号土坑 セクション(北西より)



16号土坑 完掘状況(南東より)



(K 2区) Y-3号住 セクション(北より)



Y-3号住 完掘状況(北より)



Y-3号住 遺物出土状況(北東より)



Y-3号住 炉セクション(北東より)



Y-3号住 炉完掘状況



(L区) Y-4・H-12号住 セクション(北西より)



Y-4・H-12号住 遺物出土状況(南東より)

P L. 9



H-12号住 遺物出土状況(1)(南より)



H-12号住 遺物出土状況(2)(西より)



H-12号住 カマド検出状況(西より)



(M区) Y-5号住 完壠状況(西より)



H-13号住 セクション(北より)



H-13-Y-5号住 完掘状況(南より)



H-13号住 遺物出土状況(東より)



H-13号住 カマド完掘状況(南東より)

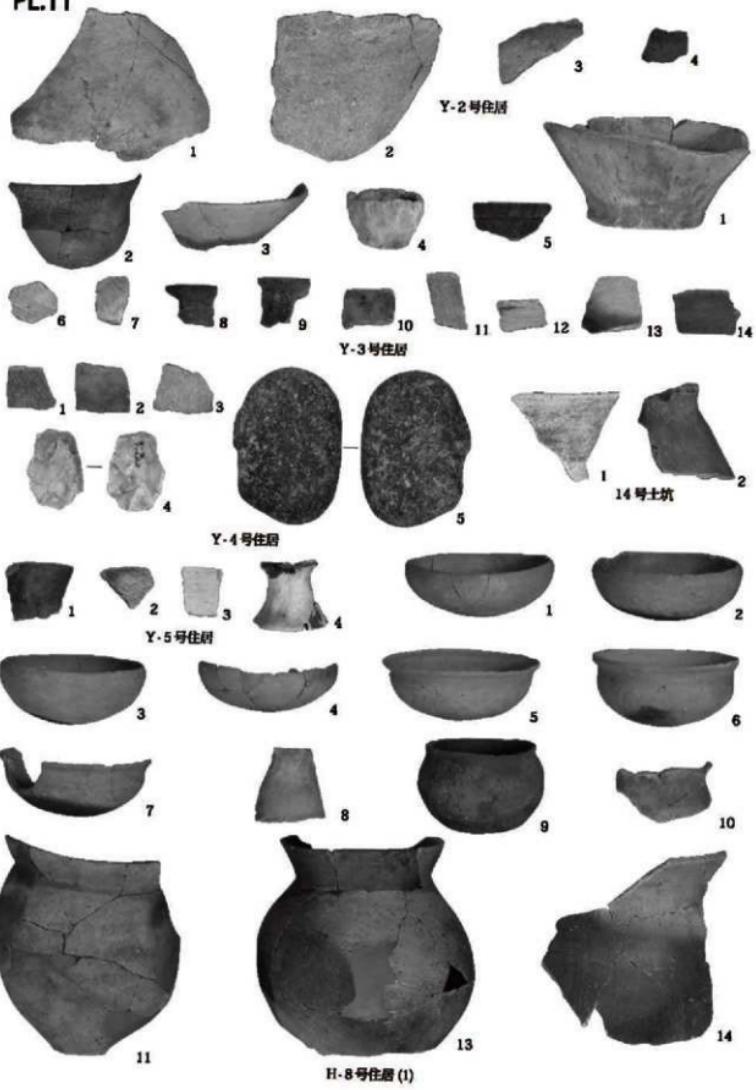


17・18号土坑 完掘状況(南より)

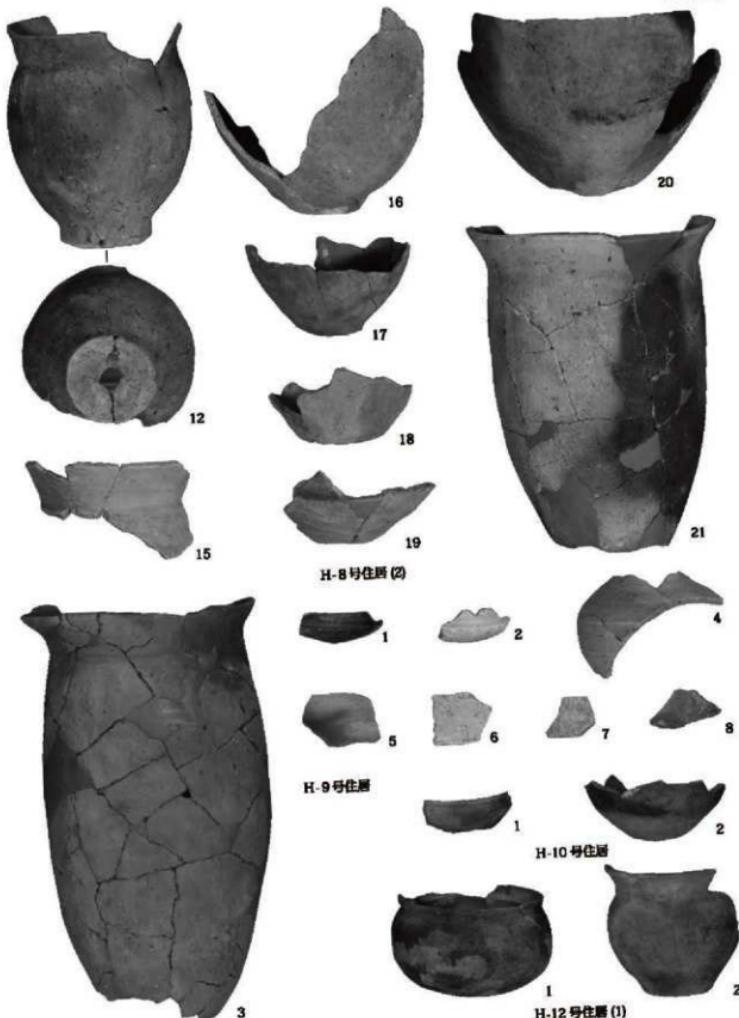


M区全景 (北西より)

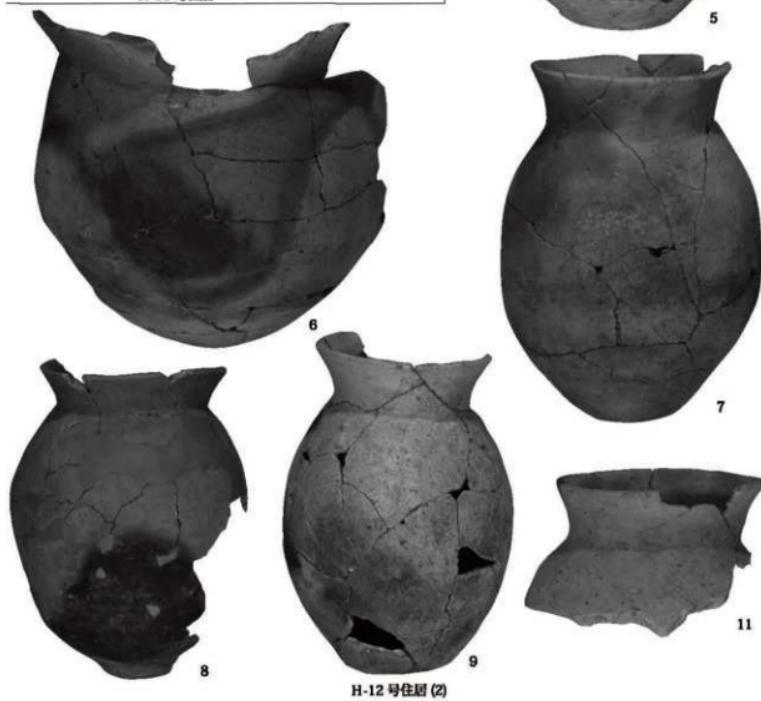
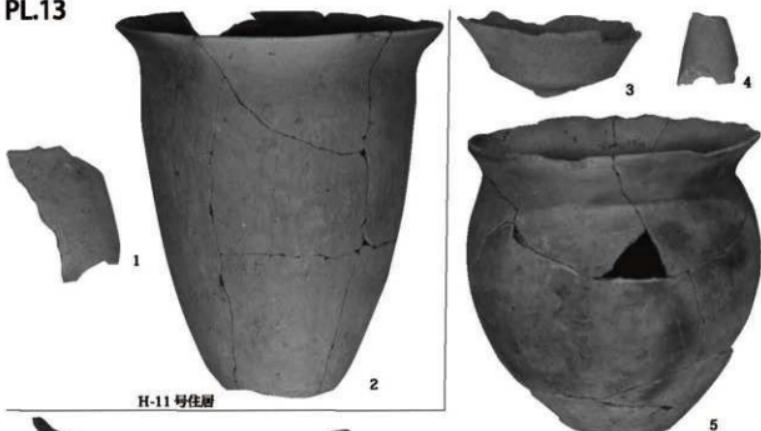
PL.11

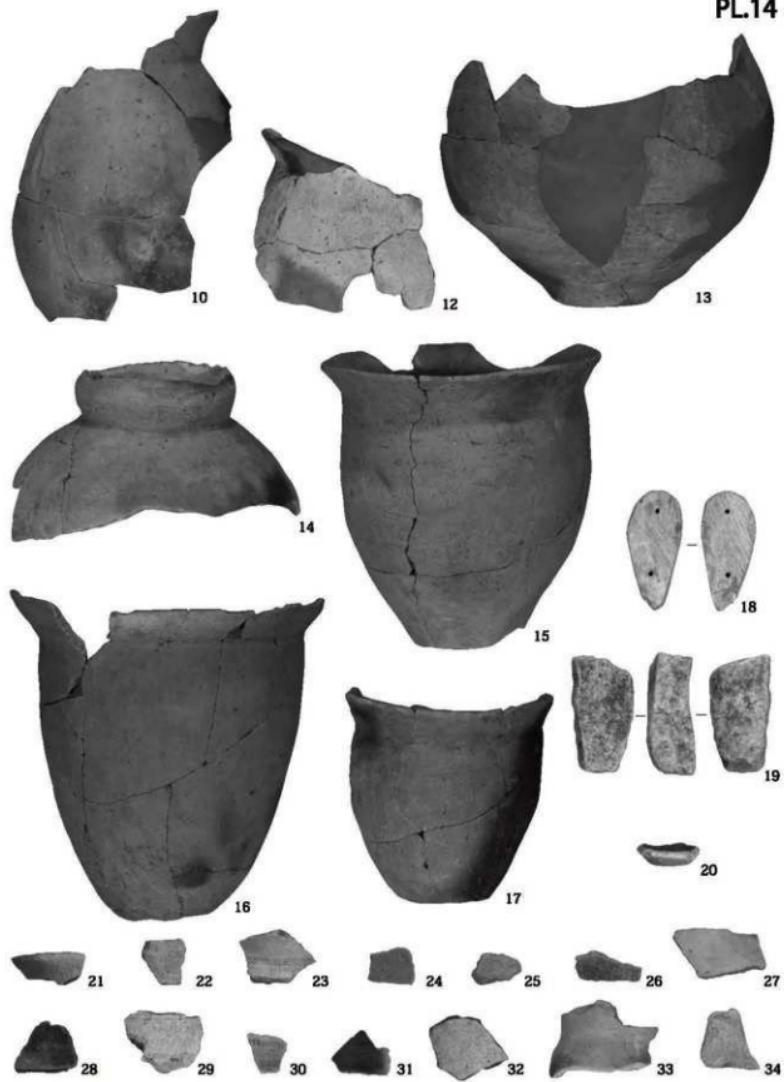


PL.12



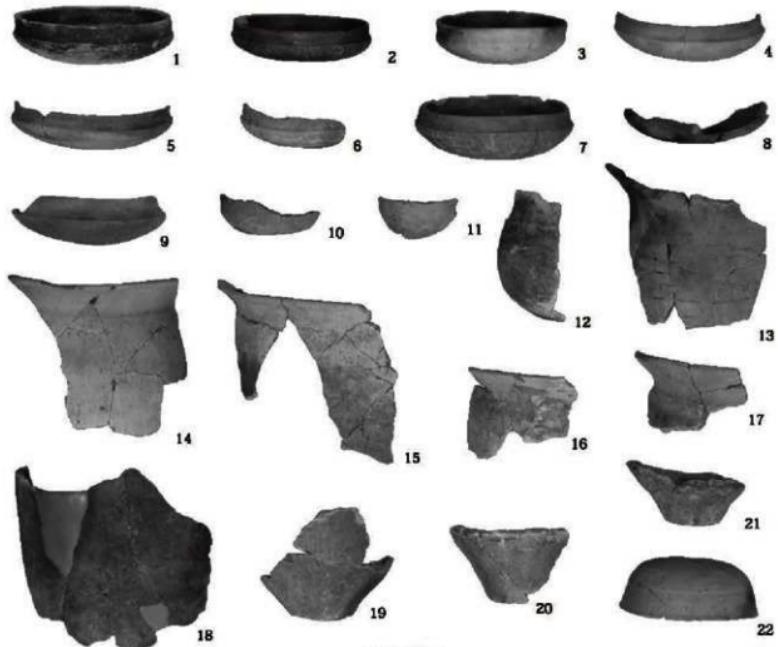
PL.13





H-12 号住居 (3)

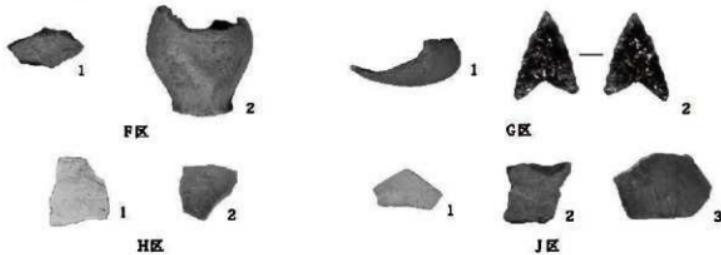
PL.15



H-13号住居



遺構外出土遺物



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	こくがしもつじにいせき
書名	国衙下辻II遺跡
著者名	小堀横土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	菅原 龍夢・堀 伸明
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 TEL:027-382-1111
発行年	西暦2014(平成26年) 3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東經 ***	調査期間	調査面積	調査測量
		市町村	遺跡番号					
こくがしもつじにいせき 国衙下辻II遺跡	かんしやくしもつじにいせき 安中市松井田町 こくがしもつじ はか 国衙字下辻346地	102113	U88	36° 19' 9"	136° 49' 12"	2012.11.01～ 2013.01.11	242m ²	小堀横土地改 良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国衙下辻II遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	弥生時代～古墳時代 整穴住居址	弥生土器・土割器・ 須恵器等	弥生時代～古墳時代の集落跡

国衙下辻II遺跡

小堀横土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 平成26年3月24日 印刷
 平成26年3月28日 発行
 編集・発行 安中市教育委員会
 群馬県安中市松井田町新堀245
 印刷 上野印刷工業株式会社
 群馬県前橋市天川大島町305-1